

# 学内広報

for communication across the UT



特集：

平成19年度入学式

平成19年度大学院入学式

平成19年度入学式が4月12日（木）、日本武道館において挙行された。式には約3,100名の新入生と、その父母など約5,400名、合わせて約8,500名が出席した。

午前9時45分、運動会応援部による演舞及び東京大学の歌「ただ一つ」のデモンストレーションがあり、10時20分、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、小宮山宏総長はじめ理事・副学長、各学部長、各研究科長、各研究所長並びに来賓の安藤忠雄特別荣誉教授、藤嶋昭特別荣誉教授、及び経営協議会学外委員の佐々木元委員、原 壽委員、矢崎義雄委員がアカデミックガウンを着用のうえ登壇し、10時40分開式となった。

式はまず、音楽部管弦楽団、音楽部コールアカデミーにより、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が約25分にわたって式辞を述べ、続いて、小島憲道教養学部長が式辞を述べた。式辞の後、本学の先端科学技術研究センター福島智准教授から約30分にわたって祝辞が述べられ、最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、12時に式を終えた。

なお、本年の入学式では、壇上において手話通訳を行い、会場内においてパソコン要約筆記を行った。壇上のメインスクリーン及び館内東西の電光掲示板横のスクリーンには、手話通訳の映像と筆記のテロップ表示が行われた。

## 平成19年度東京大学入学式 総長 式辞



東京大学総長  
小宮山 宏

東京大学に入学された皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心からお祝いを申し上げます。本日この入学式に集う新入生は、合計3,150名です。皆さんが、今日から東京大学で、実り豊かな学生生活を送られることを心より願っております。

本日、皆さんに東京大学憲章と東京大学アクションプランをお渡ししています。東京大学憲章は、長期的視野に立って、大学の在り方と学術経営の根本を定めたものです。いわば東京大学の憲法に当たる文書です。

アクションプランは、私の総長任期中、2005年度から2008年度の間にぜひ実現したいと考えている計画をまとめたものです。絵に描いた餅では決してなく、計画の多くが、実現に向かって着々と進められています。特に、「時代の先頭に立つ大学 世界の知の頂点を目指して」という副題にご注目ください。東京大学が目指すのは、日本の知の頂点ではなく、世界の知の頂点です。私は、東京大学を、世界でトップクラスの教育と研究が行なわれ、世界をリードする人材を輩出する場にしたいと考えています。アクションプランは、そのための東大改造計画なのです。アクションプランは、私が掛け声をかけるだけでは実現しません。教員と職員と、加えて学生が手を携えて、東京大学を、よりよい教育と研究の場に作り変えようと決意し、行動するとき、はじめて実現するのです。私は皆さんを、アクションプラン実現の仲間として東京大学に迎え入れます。これからお話しすることは、仲間としての皆さんに、是非とも心しておいて頂きたいことなのです。

私が皆さんに贈るメッセージは、「常識を疑う確かな力」を養ってほしいということです。

常識とは、このように考えこのように振舞うのが当然だと、多くの人々が共有する思考や行動の型のことです。社会には多くの常識が存在します。常識に従って行動することは1つ1つ



の局面ごとにあらゆる事情を勘案して判断するのに比べればはるかに楽で便利なのです。ですから、多くの人々は常識に従って行動します。

しかし、常識が常に正しいとは限りません。中には、不合理なこと、事実と反すること、人の自由を縛ることなども含まれています。不合理であるのに、権力や権威に誘導されて信じ込まされているといったこともあります。また、かつては合理的だったのに、時代や状況が変化したために不合理になるということもあります。しかし、たとえ不合理でも、疑われない常識はそのまま生き残ってしまいます。誤った常識を覆すためには、まず常識を疑うことが不可欠なのです。

学問の世界にも常識は存在します。皆さんが大学に入学して最初に教えられることは、それぞれの学問分野の基礎や土台となる部分です。その学問分野のいわば常識に相当します。そして、学問発展の歴史は、学問の根底にある常識を疑い、覆し、新たな常識を作り出してきた歴史でもあるのです。

皆さんもご存知の、ガリレオの実験を例として、この歴史について説明しましょう。

ピサの斜塔から2つの球を落とす実験によって、ガリレオが挑戦したのは、「重い物ほど速く落ちる」という当時の常識でした。「重い物ほど速く落ちる」というこの命題は、アリストテレスによって権威づけられたものであり、かつ羽毛や紙切れと石の落下速度を比べてみるなら、私たちの日常的な感覚にも合致しています。ですから、当時の人々にとっては自明の前提だったのです。

ガリレオはこの常識の怪しさを分かりやすく示すために、大きさと形が同じ鉄の球と木の球を落とし、地面に落ちる音が1度しか聞こえないことから、重さが異なっても同時に落下することを証明しました。人間の日常感覚と古代以来の権威に基礎づけられた常識は、こうして疑われ、新たな知に取って代わられることになったのです。このガリレオの実験は教科書にも取り上げられ、多くの子供に実験の意義を教えてきました。私も小学校の頃この話を知り、強く脳裏に刻み込まれました。もしかすると、私が自然科学の道を志すきっかけの一つになっていたのかもしれない。

ところで、大きな歴史的意義を持つガリレオの実験ですが、今日ではその妥当性に限界があったことが明らかになっています。ガリレオの時代には、空気が物体の運動に及ぼす作用について、科学的な認識はほとんどありませんでした。ですから、古典力学の単純明快な設定で実験の意味を解釈することができたのです。しかし、現在の科学は、空気中では、鉄と木は同時には落下しないことを知っています。空気中を運動する物体は、空気抵抗を受けるからです。軽い木の球は相対的に大きな空気

抵抗を受けるため、鉄の球ほどに加速できません。ガリレオの時代には実験の精度が低かったため、同時に落ちたと判断されてしまったのでしょう。現在の精度で実験すれば、鉄の球は木の球より明らかに先に地面に落ちることが分かります。

このように、古い常識が疑われて新たな常識が生み出され、その新たな常識が疑われてさらに新たな常識が生み出されるということを、人類は学問の世界において反復してきました。これからも、反復を繰り返していくことでしょう。それは永遠に続く知の革新過程なのです。

それでは、「常識を疑う確かな力」は、どのようにして身につけることができるのでしょうか？

疑えるものは一度はすべて疑ってみなさい、そう唱えたのはデカルトです。しかし、すべてを疑うことは1人の人間では到底不可能ですし、疑うだけで一生を終わってしまうでしょう。ですから、まず何よりも、疑わなければならない常識を嗅ぎ出す直感と、その疑いを論理と証拠によって確かめる力が必要です。論証や実証は、まじめに勉学に励めば必ずそれなりの力がつきます。学問とはそのようにできているからです。教科書を読めば、その分野で広く知られた論証や実証のスタイルが必ず書かれています。しかし、疑うべきものを探し出す力は、ふつう、教科書には書いてありません。ある分野を学ぶということは、その分野の常識を身につけることであって、常識を疑うことではないからです。

疑うべきものを見つける最初の手がかりは、ふつう「閃き」といわれる直感的な知の働きだと思います。ガリレオには遠く及びませんが、私も化学工学という分野で、それまでの常識を変えるような発見をいくつか行なってきました。今思い返すと、常に、最初にあったのは「閃き」でした。

「閃き」は「思いつき」とは違います。学問的な疑いの直感とは、その人の頭の中で、多様な知が関連づけられ、構造化されている状態ではじめて働くのです。皆さん、想像してみてください。皆さんの頭の中にも、これまでに得たさまざまな知が相互に関連づけられ、構造化されているでしょう。

怪しげな命題は、いかに多くの人々が信じようとも、知の全体構造のどこかで必ず矛盾や齟齬を生じます。「閃き」とは、研究者がほとんど無意識のうちにそうした矛盾や齟齬に気づき、新たな知の構造を求めて、瞬間的に知の組み換え作業を行なうことだと、私は思っています。

知を構造化することと、大量の情報を持つことは、全く異なることです。最近では、インターネットを駆使して、誰でも大量の情報を短時間のうちに入手できるようになりました。こうした情報環境の中で育った皆さんは、学術情報は簡単に手に入るのが当然だと思っておられるでしょう。しかし、ひと昔前の

情報環境は全く違っていました。私が若い教授だった頃、たかだか20年前でも、学術情報を入手するためには多くの論文に目を通したり、人に話を聞いたり、カードを作って整理したりと、大変な手間が必要だったのです。どちらが便利かと問われれば、もちろん現在の方が便利に決まっています。しかし、まさにその便利さにこそ落とし穴があるのです。今のように便利でなかった時代に、研究者が情報収集と整理にかけた膨大な手間と時間は、無駄なように見えて、決して無駄ではなかったのです。その作業を通じて、研究者の頭の中で多様な情報が関連付けられ、構造化され、それが「閃き」を生み出す基盤となっていたからです。インターネットで入手した、構造化されていない大量の情報は、「思いつき」を生み出すかもしれませんが、「閃き」を生み出すことは極めて稀だと、私は確信します。頭の中に、いかに優れた知の構造を作ることができるか、それが「常識を疑う確かな力」を獲得する鍵なのです。優れた知の構造と、それを基盤とする「常識を疑う確かな力」を確実に獲得できる方法を、残念ながら私は知りません。しかし、獲得できる可能性の高い方法について語るができます。私は、これから述べる3点が重要であると思います。事の成否は、これからの学生時代、皆さんがどのような知的生活を送るかに懸かっているのです。

第1に、教師から多くを学び取ってください。

東京大学は、一流の業績をあげた研究者のみを教員に採用しています。一流の業績とは、大小さまざまな常識を疑い、それを覆すことで達成されたものです。そのことは、あらゆる専門分野について言えることです。ですから、「常識を疑う確かな力」を獲得しようとする学生は、教師を、専門知識を与えてくれる先生と考えるのではなく、「常識を疑う確かな力」を身につけた先輩と考えて、教師の経験から多くのことを学び取っていただきたいのです。

例えば、このあとご挨拶いただく福島智先生は、東京大学先端科学技術研究センターの准教授ですが、目が全く見え耳が全く聞こえないというハンディキャップを負いながら、最先端の研究をしておられます。先生の存在そのものが常識に挑戦し、常識を覆すような方なのです。福島先生の話をつかなくて、どうしてそんなことができたのかを考えることは、皆さんが東京大学において「常識を疑う確かな力」を身につける第一歩となるでしょう。

第2に、同世代の仲間を作ってください。

教師から学ぶことも大切ですが、同世代の仲間と切磋琢磨することはより大切であると、私は自らの経験に照らして考えています。教師は優れた先輩ですが、先に第一線を退きます。同世代の仲間は、ともに成長し、これから先の数十年、皆さんと

共に第一線を歩み続けるのです。仲間を作るには、議論をすることが重要です。メールや携帯電話が普及したためでしょうか、私は学生たちの議論する力、特に顔を合わせて議論する力が落ちているように思えてなりません。議論することを通じて、自分が考えていることを相手に伝える能力と、相手の考えていることを理解する能力が磨かれていきます。議論をすることではじめて、自分の考えを相対化することができるのです。議論を恐れず、議論を通じて多くの仲間を作ってください。

その際、自分の専門分野に近い人だけでなく、対角線上にいるような、自分とは異質な分野の仲間も作っていただきたい。私は学生時代にアメリカン・フットボール部に所属していましたが、部活動のなかでたくさんの文科系の友人を作り、彼らの発想から多くのことを学びました。彼らとの付き合いは、40年の歳月を経た現在でも続いています。

第3に、遠い将来を見据えてください。

東京大学では、毎年、学生生活実態調査を行っています。最近の調査結果を見ると、大学の勉学に何を期待するかという設問に対して、専門性を身につけたい、特に卒業してすぐに社会で役立つ専門的なことを学びたいと、そう回答する学生の比率が増えています。すぐに役立つ専門知識を身につけて自らの競争価値を高めたいという気持ちは、分からないでもありません。しかし、皆さんが本当に競争価値を高めたいと思うのであれば、必要なことは、学生時代に「常識を疑う確かな力」を身につけることであって、すぐに役立つ専門知識を身につけることではありません。社会変化の速度が急速に増大しつつある現在、実用的な専門知識はあっという間に古びてしまいます。実用的であればあるほど、古びる速度は速いのです。

皆さんの視野には、就職までしか入っていないのではないかと、私は恐れます。もっと、視野を広げましょう。30歳、40歳になった時に、自分がどうなっているだろうか、想像してみてください。その時に自信をもって活躍するために、今何が必要かを考え、それを学生時代に身につけるべきです。社会はそれを皆さんに期待しているのです。

必要なのは、すぐに役立つ知識ではありません。知識を獲得するための知識なのです。そして、知識を獲得するための知識よりも、さらに大切なのは、「常識を疑う確かな力」なのです。何故なら、「常識を疑う確かな力」こそが、いかなる分野に進もうと、皆さんを最先端に推し進める力を持つからです。必要なことは、有用な知識を身に付けることではありません。「常識を疑う確かな力」を身につけることによって、皆さん自身を持続的に有用な存在にすることなのです。

この式辞の冒頭で私は、東京大学アクションプランを引きながら、東京大学が目指すのは、日本の知の頂点ではない、世界

の知の頂点だと申しました。そして、皆さんをアクションプラン実現の仲間として東京大学に迎え入れると申しました。これまで述べてきた「常識を疑う確かな力」は、アクションプラン実現の仲間としての皆さんに、私が期待していることなのです。ただし、「常識を疑う確かな力」を身につけるだけでは、世界の知の頂点に立つことはできません。その力を発揮することが必要です。そして、その力を発揮するために不可欠なのが、「先頭に立つ勇氣」であると、私は確信しています。最後に、そのことをお話ししましょう。

世界の知の頂点を目指すということは、トップランナーに追いつくことではありません。自分がトップランナーになることです。トップランナーに追いつくことと、トップランナーになることは、きわめて違う—譬えて言えば、富士山とエベレストくらい違う—ことなのです。東京大学は1877年4月12日に創立され、本日ちょうど130周年を迎えます。この130年の間に東京大学が追求してきたのは、トップランナーに追いつくという課題でした。この課題は既に達成されています。様々な世界大学ランキングに見られるように、東京大学は既に大部分の分野で世界トップの研究水準を達成しているからです。

トップランナーに追いつく際には、明確な目標があります。ひたすらその目標に向かえば、追いつくことができるわけです。しかし、トップランナーには模倣すべき目標がありません。トップランナーは、自ら目標をつくり、自らリスクを取り、自らの行動を決断しなくてはなりません。したがってトップランナーは孤独です。ですから、「先頭に立つ勇氣」は、「孤独を恐れぬ勇氣」と言い換えることも可能なのです。

東京大学が世界の知の頂点を目指すためには、東京大学の教員と職員と学生が、各々の活動分野で「先頭に立つ勇氣」を持たなくてはなりません。皆さんは東京大学の学生として、仲間を作り、仲間との連帯を求めながら、同時に「孤独を恐れぬ勇氣」を持つ、タフで優しい精神の持ち主に成長してください。

最後に、本日お出でいただいているご家族の皆様一言申し上げます。

皆様のお子さんは、本日東京大学に入学いたしました。長かった受験の日々を思い返して、皆様の感慨も深いものがあると思います。心からお祝いを申し上げます。入学式は皆様のお子さんにとって、世界のトップランナーを目指す新たな旅立ちの日です。この新たな旅は、受験勉強よりもはるかに苦しい、しかしはるかに実り豊かな旅になるはずです。どうか今後ともお子さんを暖かく見守り、励ましてくださるようお願い致します。本日の式辞の結びといたします。

(平成十九年(2007年)四月十二日)



## 教養学部長 式辞



教養学部長  
小島 憲道

新入生の皆様、東京大学へのご入学おめでとうございます。また、ご家族の方々など、新入生の皆様を支えてこられた方々にも心からお慶びを申し上げます。

私は、新入生の皆様が東京大学で最初の2年間を過ごされる教養学部を代表して、皆様に歓迎の意を表したいと思えます。

東京大学のキャンパスには本郷キャンパス、駒場キャンパス、そして千葉県柏市にある柏キャンパスがあります。この三つのキャンパスの一つである駒場キャンパスで皆様はこれから少なくとも2年間学ばれるわけです。私は、ここでまず駒場キャンパスの教養学部について紹介し、それから皆様の大学生活の始まりに際してお願いしておきたいことを述べたいと思っております。

今、少なくとも2年間といいましたが、それは皆さんの中には駒場キャンパスで3・4年生の課程に進学し、さらに大学院に進まれる方も少なからずおられるからです。皆さんがこれから所属することになる1・2年生の課程は教養学部前期課程といえます。教養学部は、約7,000人の1・2年生が学ぶ前期課程と約400人の3・4年生が学ぶ後期課程とから成っています。また、駒場キャンパスには、約1,400人の文系および理系の大学院生が研究する総合文化研究科があります。従いまして、約9,000人の学生が学ぶ駒場キャンパスで、これから皆様は大学生活を送られるわけです。

東京大学は1949年に東京帝国大学から新制の東京大学に移行しましたが、新制大学発足時、殆どの大学に教養部が設置され2年間、一般教養教育を受けた後、専門課程に進学するシステムが採用されました。その後、専門課程の早期教育が重視される中、殆どの大学から教養部がなくなりました。このような社会情勢の中にあつて、東京大学は教養学部と前期課程教育の重要性を再認識するとともに前期課程教育のカリキュラム改革を行い、自然科学の進歩と国際社会の変化に対応した教養教育を行ってきました。皆様もよく承知されていることと思いますが、日本の多くの大学では大学入学時に学部・学科が決まっているのに対して、東京大学では前期課程教育を終了した後、学部・学科を選ぶシステムをとっています。これは、高校までに獲得した知識と興味で将来の進路を決定するのではなく、大学に

入学してから様々な分野の最前線の情報に出会い、また幅広い教養を身につける中で、自己の適性を知り、進路を選ぶことが重要であるという理念に基づくものであります。矢内原忠雄初代教養学部長は、1949年に教養学部が設立された時、「ここで部分的専門的な知識の基礎である一般教養を身につけ、人間として偏らない知識をもち、またどこまでも伸びていく真理探究の精神を植え付けなければならない。その精神こそ教養学部の生命である」と述べています。教養学部前期課程の重要な目的の一つは、広い観点から学問の多様性と奥深さを理解し、特定の専門分野に偏らない総合的な視点や柔軟な理解力を獲得することです。教養学部のこの精神はリベラル・アーツという言葉で表現されてきました。リベラル・アーツの起源は、古代ギリシャまでさかのぼれる概念で、「人を自由にする学問」という意味をもっています。近代ヨーロッパにおいては、実利性、職業性、専門性といったものから解放された自由な学問という意味で、知的エリートの教養のあり方を表す概念として使われて来ました。先ほど申しましたように、東京大学における前期課程教育の重要な目的の一つは、広い観点から学問の多様性と奥深さを理解し、特定の専門分野に偏らない総合的な視点や柔軟な理解力を獲得するリベラル・アーツ教育で、矢内原忠雄初代教養学部長をはじめ多くの人々の情熱によって築きあげられ受け継がれてきた東京大学の教育理念です。グローバル化が進む今日、世界で真の知的なリーダーとして活躍する人材を育てるためには、総合的判断力、社会的責任感、地球的な視野という三つの資質が不可欠です。21世紀になり、再び教養教育が重要視されてきていますが、これは従来の縦割り型の学問体系では解決することのできない多くの難問が山積し、総合的視野を持ち、困難な問題を解決することのできる資質を持つ人材が望まれているためです。地球規模の環境問題、化石燃料に替わる環境にやさしいエネルギー問題、民族紛争と人間の安全保障などどれ一つとっても縦割りの学問分野では解決できないものです。

教養学部前期課程では、このリベラル・アーツ教育を実践するため、基礎学力を身につけるための基礎講義の他に、思想・芸術・国際・地域、社会・制度、人間・環境、物質・生命、数理・情報の諸分野にわたって毎学期400から500の総合科目が選択科目として開講されています。また、主題科目として全学から数多くの教員が少人数クラスで深い問題意識と強い動機づけにそった多彩な授業が開講されています。このように、教養学部前期課程の授業は、駒場キャンパスの大学院総合文化研究科・教養学部にも所属する先生方の他、本郷キャンパスや柏キャンパスなど東京大学の他の学部、研究科、研究所の先生方、さらには東京大学以外の先生方など大勢の先生方によって担われています。様々な学問分野の最先端で活躍しているこうした先生方による授業から、様々な分野の最前線の情報に出会い、

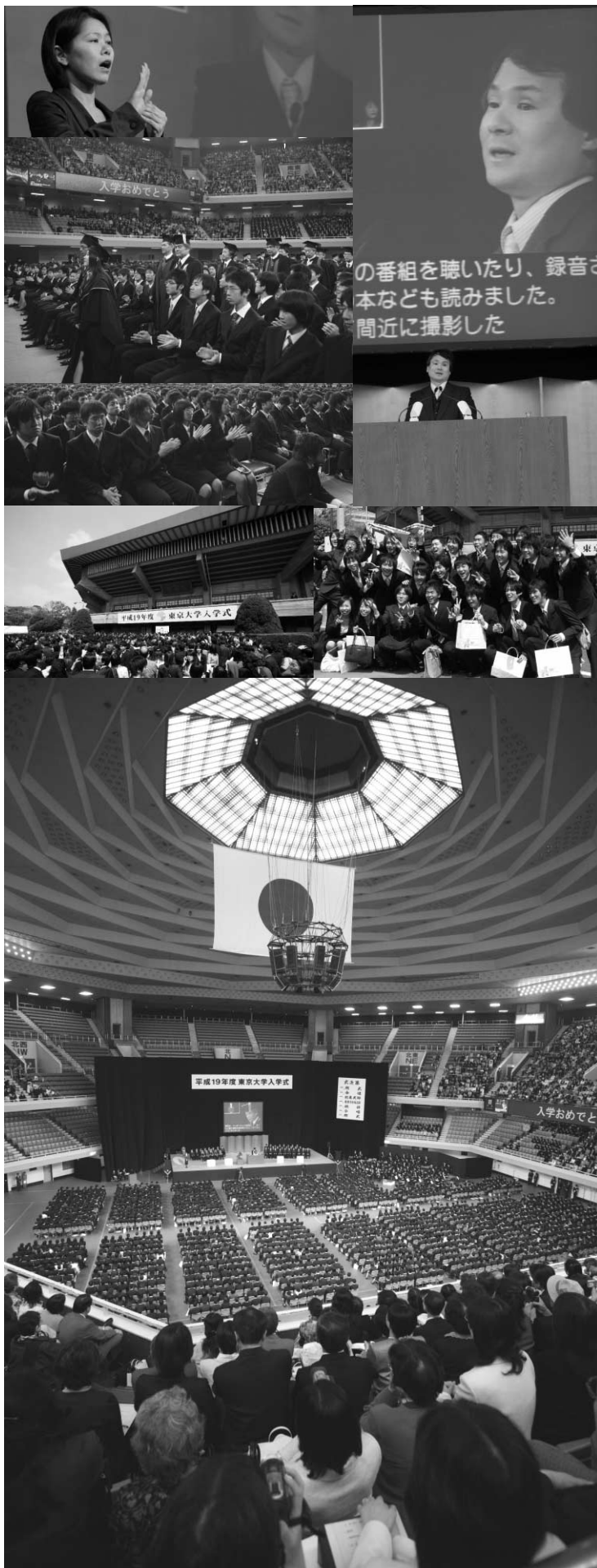
また幅広い教養を身につける中で、自分の適性を知るとともに人生をかけて取り組む課題を見つけ、自分の進路を決めて頂きたいと思っております。

皆様は文科一類から理科三類まで六つある科類のいずれかに所属されています。それぞれの科類は将来皆様が進学する学部と凡その対応関係は持っていますが、各科類に最も密接に対応する専門課程以外のところにも進学することができるよう、進学振り分け制度の中に全科類枠を設けています。所属する科類の所定単位を取得し、進学する学部が要望する授業科目を習得すれば、文系の科類に所属する学生が理系の学部に、また理系の科類に所属する学生が文系の学部に進学することも可能です。

このような教養学部で学ばれる皆様に、入学式にあたり、お願いしたいことを述べたいと思います。それは、知的な好奇心と能動的な学びの姿勢を持って欲しいことです。高校までは、大学の入学試験に出る範囲の中で勉強に励んでこられたことと思います。高校までに学んでこられた内容は、既に確立し定説となった事柄を覚え理解するという受動的な学びでありました。しかし、大学では各自が学習して得た知識を基礎として、その上に一人一人の独創性を獲得していくことが要求されます。知らないこと、まだ学んでいないことについて、知的な好奇心をもって自ら探求することが必要なのです。これは、大学を卒業して社会で活躍するとき、もっとも重要で必要不可欠な資質となります。皆様が大学に入学されて最初に戸惑うのは、教科書のない授業が多いことだと思います。特に、総合科目や全学自由ゼミナールでは、教科書のない授業が多いと思います。このことは、大学の授業とは、最先端の内容を取り込みつつ、常に更新されていることを反映しておりまして、学生の皆様は授業を通して刺激を受け、それを契機に自ら探求していく姿勢を持って頂きたいと思っております。また、知的な好奇心を持って多くの本を読んで頂きたいと思っております。授業の中で先生から紹介される本も沢山あると思いますが、教養学部の教員が中心になって執筆した『教養のためのブックガイド』という本が東京大学出版会から出版されています。ぜひ読んで頂きたいと思っております。

皆さんがこれから学生生活をおくる駒場キャンパスには、緑豊かな自然、パイプオルガンや駒場美術博物館など教養と文化の香りのする施設が沢山あります。また、2006年に完成した駒場コミュニケーション・プラザは、創造的な教育研究を生活基盤の側面から支える場として外国人留学生・研究者を含めた学生および教職員の交流が行なえる場として活用されています。駒場キャンパスのこのような豊かな環境が新入生の皆さんに最大限に活用され、専門性と豊かな教養を身につけて行かれることを願い、教養学部長の式辞とさせていただきます。

(平成十九年(2007年)四月十二日)



## 祝 辞



先端科学技術研究センター 准教授 福島 智

皆さん、東京大学ご入学おめでとうございます。ひとことお祝いのご挨拶を申し上げます。皆さんは今、将来への希望に胸を膨らませたり、もしかすると既に明確な人生の目標があって、その目標実現のためにこれからの大学生活を送ろうと決意なさっていることと思います。あるいは、かつて私がそうであったように、大学入学時点では、まだ将来への明確な目標があるというわけではなく、しかし、大学で多くの人との出会いや様々な学問に触れることを期待してわくわくしている人もおられると思います。

ところで、皆さんは、将来の目標とか、卒業後の就職の希望といったこととは別に、人生における「夢」を持っておられるでしょうか。私には幼い頃から一つの夢があります。ちょっと口にするのが恥ずかしいのですが、それは「宇宙人に会いたい」という夢です。それが無理なら、せめて宇宙空間に自分が出かけてみたいという夢です。そして、この思いは、皆さんの多くと同世代だった18歳の頃から、更に強くなりました。なぜ、こんな夢を抱いているかと言いますと、宇宙は私の心の中の「第二のふるさと」のようなものだからです。少し私自身の体験をお話しさせていただきます。

私は1962年生まれで、現在44歳です。私は生まれてから9歳までは、目が見えて、耳が聞こえる、普通の子どもでした。わたしが小学1年生だった1969年7月20日、有名なアポロ11号の月面着陸という人類の歴史に残る出来事がありました。あのときのテレビ中継のインパクト、そして、新聞に掲載されたページいっぱい広がるような、あの写真の大きさを今も忘れることができません。私はそのときから宇宙に心惹かれていました。宵の明星である金星の輝き、冬の夜空のシリウスやオリオン座の光に、子供心に何か吸い込まれてしまうような、そんな神秘的な感じがしていました。父に天体望遠鏡を買ってもらう約束をしたのは小学校3年生の2学期のことでした。しかし、それからまもなく私は失明してしまい、二度と星の光を見られなくなりました。

その後は、専ら音の世界に生きていました。目は見えませんが、耳から入る情報もたくさんありますから、宇宙に関するテレビやラジオの番組を聴いたり、録音された本や点字の本なども読みました。木星を初めて間近に撮影したボイジャーの特集番組を、1980年の夏、テレビで聴いたことを思い出します。ところが、その年の暮れ、今度は耳が聞こえなくなり始めて、ほぼ3ヵ月の間に、全く見えない、全く聞こえない全盲ろう者の状態になってしまいました。

「盲ろう者」といっても、なかなか一般的には通じませんが、あのヘレン・ケラーさんと同じ障害だと言えば、少しおわかりいただけるでしょうか。見えなくて、同時に聞こえないということは、主観的には、自分がこの地上から消えてしまって、まるで地球の夜の側の、真っ暗な宇宙空間に連れて行かれたような感覚に襲われる状態でした。何も見えず、何も聞こえない、いつまでも続く静かな夜の世界。それは言葉で表現できないような孤独と絶望の世界でした。

私が最もつらかったのは、見えない・聞こえないということそれ自体よりも、周囲の他者とのコミュニケーションができなくなってしまったということです。私から声で話すことはできませんでした。しかし、相手の返事が聞こえず、表情も見えない私には、会話をしようという意欲さえなくなっていきました。コミュニケーションとは、双方向的なものなのだな、とそのとき理屈抜きにつくづく実感しました。もう一つ強く実感したのは、人間には、空気や水や食べ物と同じように、コミュニケーションが生きる上で不可欠なものなのだな、ということでした。私がこうした絶望の状態から抜け出せたのは、母が偶然思いついた「指点字」という会話方法、点字の仕組みを応用して指先でタッチするコミュニケーション手段のおかげでした。それは、指から指に伝えるペンと紙を使わない速記のようなものです。このように、指先で私の指先をタッチしてもらいます。「あ、い、う、え、お・・・」と、このように伝えてもらうわけですね。ここで少しゆっくりと実演してみます。(※ここで、横に立つ通訳者に「あ、い、う、え、お」と伝えてもらい、指点字のデモンストレーションをする)

私が絶望の状態から抜け出せたのは、もっと正確に言えば、この指点字という手段そのものではなく、その手段を使って実際に話しかけてくれたり、周囲の人の言葉や周りの様子を伝えてくれたりする「指点字通訳」というサポートをしてくれる人たちが私を助けてくれたからです。私はこの指先で伝えられる言葉の力によって生きるエネルギーを与えられました。

話は飛びますが、私も10年ほど前から、パソコンと特別なソフト、そして点字のディスプレイ装置などを組み合わせて、Eメールをしています。私のEメールでのハンドル・ネームは、



E T です。これは「エクストラ・テレストリアル (Extraterrestrial)」、つまり地球外生命体、要するに宇宙人の意味の略称ですが、私が盲ろう者になって、指点字を使い始めた1981年の翌年、スピルバーグ監督で有名になった映画のタイトルでもあります。その映画には、自らをE. T. と呼び、地球の花や木に指先で触れることで会話ができる宇宙人が出てくるので、それに引っかけたハンドル・ネームです。つまり私は自分が盲ろう者になって、いったん失った耳で聞くコミュニケーションを、今度は指先のコミュニケーションとして取り戻すことができ、これは宇宙空間のような状態から地球に戻ってきたまるでE. T. のような存在だと自分のことを半分冗談、半分本気で思っている、ということです。

さて、話を戻しますが、私は高校2年生で盲ろう者となったわけですが、そのときは、そもそも高校を卒業できるのかどうかさえわかりませんでした。もともと大学への進学を希望していましたが、目が見えないだけでなく、耳も聞こえなくなったので、はたして大学進学などできるのかどうか、また進学はできてその後、大学での生活が送っていけるのかどうか、更に言えば、もし大学を卒業したとしても、その後、仕事があるのかどうか、などなど将来のことを考えていると、不安なことばかりでした。

そんなとき、私の高校時代の担任の先生は次のようにおっしゃいました。「先のことをいろいろ考えたって誰にもわからないよ。日本の盲ろう者で大学に進学した人はこれまでにないそうだけれど、前例がないなら君がチャレンジして前例になればいいじゃないか。君が大学進学を希望するなら応援するよ。うまくいかなければ、そのときまた考えればいいさ」と。そして、指点字の通訳者を育てたり派遣したりして、私の大学進学や入学後の生活を支えてくださいました。

こうして、私は1983年に東京都立大学に入学することができ、教育学を専攻しました。その後、大学院に進み、研究者への道を歩み、都立大学助手、金沢大学助教授を経て、2001年からは東京大学先端科学技術研究センターでバリアフリー分野の助教授として学生の教育と同時に、広い意味でのバリアフリー論や障害学の研究などに取り組んでいます。また、東京大学全体の物的・人的双方のバリアフリー化を推進する「バリアフリー支援室」の活動にも参画しています。

その一方で、私が大学に進学したことがきっかけとなって、日本でも盲ろう者について徐々に社会的に知られるようになり、私自身も、私と同じような障害を持つ盲ろう者のための福祉活動に取り組んで、現在、全国盲ろう者協会理事、世界盲ろう者連盟のアジア地域代表などを務めています。

なお、世界で最も有名な盲ろう者であるヘレン・ケラーは、

今から約一世紀前、世界で初めて盲ろう者として大学に進学した人でもあります。彼女の言葉に次のようなものがあります。

「人生は恐れを知らぬ冒険か、それとも無かのどちらかである」と。日本はややもすると前例を重視する文化が支配的ですが、前例がなければ自分が前例になる。先のことがわからなくても思いきってチャレンジする。こうした冒険心が人生には必要でしょうし、そうでないとおもしろくないと思います。

さて、話はアポロ計画に戻りますが、アメリカのアポロ計画、あるいは、人類の月面到達を最初に公にしたのは有名な35代大統領、ジョン・F. ケネディです。彼は1961年の時点で、「60年代中に月面への人類到達を実現したい」と議会で演説しました。これほどスケールの大きな夢の表明は、歴史上、あまり例のないことだろうと思います。そして、アポロ計画やアメリカという国そのものには、様々な問題や課題もあるでしょうが、このケネディの宣言を本当に実現してしまうということは、やはりアメリカという国の底力、そして人間の可能性のすごさを私は感じます。

ところで、私は3年前、2004年の11月に、ワシントンで開かれたある国際シンポジウムで講演をしたのですが、その折、偶然、このジョン・F. ケネディの実の妹であるユニス・ケネディ・シュライバーさんというとても元気のよい高齢の女性とお会いして、短い時間でしたが、面談する機会がありました。私は二つの意味で、とてもエキサイトしました。一つは、ユニスがあのケネディの妹であること、そしてもう一つは、ユニスが、知的発達障害の人たちのオリンピックである「スペシャルオリンピック」を始めた人だからです。一般にはあまり知られていませんが、ジョン・F. ケネディの妹で、ユニスのお姉さんにあたるローズマリー・ケネディという女性がいて、その女性は知的発達障害を持っていました。ユニスが1962年に自宅の庭を開放して知的障害の人や関係者のためのデイキャンプを開いたのが、現在のスペシャルオリンピックの始まりだと言われています。これはケネディがダラスで暗殺される前の年に当たります。

ここで、スペシャルオリンピックについて詳しく述べることはできませんが、簡単に申し上げれば、それは通常のオリンピックとは異なり、競争相手を打ち負かして、金メダルを取ることが真の目標ではないということです。それは多くの人の助けを借りながら、お互いの勇気を示し合う、そして競技が終わればみんなが表彰台上り祝福し合うようなそんな素敵なオリンピックだということです。一昨年、2005年の2月に、長野県でスペシャルオリンピックが開催されましたので、テレビなどでご覧になった方もおられるでしょう。なお、このスペシャルオリンピックが複数形なのは、日常的なトレーニング

から世界大会に至るまで、いつでも、世界中のどこかで、この活動が行われているからです。そして、スペシャルオリンピックの活動が目指す社会とは、一人ひとりの個人が自然に、あるがままに受け入れられ、認められるような社会だと言われています。

私はユースとお会いしたとき、ジョン・F. ケネディが内面に秘めていたエネルギーの源の一部を垣間見た気がしました。ご承知のように彼は、一方で、ニュー・フロンティア政策や月面への宇宙探検など、アグレッシブで、アクティブな姿勢を重視しているわけですが、それはただ単に「強い者だけが勝ち残る社会、競争に勝った者だけが報われる社会」を目指していたのではなかったのではないかと私は思いました。彼が真に価値を置いていたのは、すべての人間が、それぞれが抱える様々な条件と向き合いながら、自分と社会をより良く変革していくための努力とチャレンジをすること、言い換えれば、ニュー・フロンティアはどこか外部にあるのではなく、自分自身の中にあることを自覚することを訴えたかったのではないかと、私は感じました。

私は盲ろう者になって、その体験から二つのことを学んだように思います。一つは、人間は一人ぼっちでは生きていけないということです。他者とのかかわり、他者とのコミュニケーションがなければ、どのように知識や情報があっても、あるいは、素晴らしいご馳走を食べていても、生きる上での魂のエネルギーは湧いてこないということです。そしてもう一つは、どのような困難な状況にあっても、可能性がゼロになるということはない、チャレンジし、現状を変革していく可能性は必ずある、ということです。

皆さんは、これまで大変な困難を乗り越え、チャレンジし、そして東京大学に入学なさいました。これは素晴らしいことです。これからも、学生時代や大学を卒業して社会に出てからも、様々な種類の困難やチャレンジを経験なさると思います。最後に、困難に挑戦するということについて私が考えることを申し上げます。

私は「挑戦」とは、一人だけでがんばって一人だけで成果を得ることではなく、常に有形・無形の他者の手助けと共にあるものだと思います。

挑戦とは、単に無謀な危険を冒すことではなく、地道な努力と準備があって、成功するものです。

挑戦とは、相手を打ち負かして競争に勝つことを意味するのではなく、その本質は、自分自身に挑戦することです。

挑戦とは、他者の立場を想像する力と、他者と協力しながら新しいものを生み出していく営みです。

挑戦とは、ときに孤独なものですが、一人だけで生きている

人間は世界中どこにも存在しません。周囲の人とのつながり、他者とのコミュニケーションを常に重視すべきです。

そして、挑戦とは、常識的な意味での社会的な名誉やステータスを得ることだけがその目標なのではなく、自らがしっかりと生きていくこと、そして自分と他者が共に生きていくことを支えていく営み自体の中に、本当に困難な部分があり、その営みこそが最も重要な挑戦なのだと思います。

私は先ほど、「宇宙人に会うのが夢だ」と申し上げました。その夢は今も変わりませんが、実は既にその夢の一部は実現しています。なぜなら私たち全員は地球上にあって、太陽の周りを回りながら、そして天の川銀河の回転に乗りながら、大宇宙と共に旅する存在であり、まさに宇宙と共に生きている「宇宙人」同士だからです。

とはいえ、皆さんと、たとえば盲ろう者の私との間には、様々な相違点があり、大きな距離が開いているかもしれません。見えない聞こえない私には、直接皆さんを把握することはできないからです。しかし、考えてみれば、人は皆、直接、他者の本質を把握することはできません。できるのは、互いの魂にそっと触れ合うことだけです。そうであればなおのこと、互いに触れ合うことを大切にしていきたいと思います。共に宇宙を旅する仲間として、これからも一緒に歩んでいきたいと思います。そして、東京大学というフィールドを拠点にして、新しい冒険とチャレンジの歴史を築いていきたいと思います。

本日はおめでとうございました。

(平成十九年(2007年)四月十二日)



(特集写真撮影 : 尾関裕士)

平成19年度大学院入学式が4月5日（木）に、安田講堂において挙行された。

式は、第一部（9時30分開式）人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府、公共政策学教育部、第二部（11時15分開式）理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、医学系研究科、薬学系研究科、数理科学研究科、情報理工学研究科の2回に分けて行われた。

式には、本年度大学院入学者数4,789名のうち約3,000名（第一部約1,200名、第二部約1,800名）の新入生が出席した。

開式に先立ち、小宮山宏総長はじめ理事・副学長、各研究科長並びに各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、壇上列席者の紹介の後、開式となった。

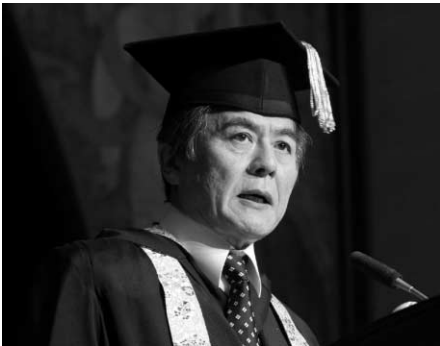
はじめに総長から約20分にわたって式辞が述べられ、続いて各研究科・研究所を代表して第一部は、植田和男経済学研究科長、第二部は、松本洋一郎工学系研究科長が式辞を述べた後、式は終了した。

なお、新入生の父母会場（法文2号館31番教室、3番大教室及び理1号館小柴ホール）には、モニターを設置のうえ安田講堂での式典の様相を放映し、父母など約1,700名が出席した。

ためにこそ、東京大学は不断の自己変革を必要としているのです。私の総長任期はちょうど折り返し点を過ぎたところですが、私は、このアクションプランの実行を通して東京大学を革新し、そのことによって、より高い水準で憲章の精神を実現したいと考えております。

「時代の先頭に立つ大学 世界の知の頂点を目指して」というアクションプランの副題に注目してください。この副題が、私の東京大学改造計画の目標を示しています。私は、東京大学を時代の先頭に立つ大学にしたいと考えています。そのために、東京大学のすべての構成員に、世界の知の頂点を目指して頂きたいと希望しております。本日大学院に入学される皆さんも、世界の知の頂点を目指して励んでください。それは、21世紀の日本を担う皆さんに最もふさわしい挑戦課題であると、私は確信しています。

## 平成19年度大学院入学式 総長 式辞



東京大学総長  
小宮山 宏

東京大学大学院に入学された皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心からお祝いを申し上げます。

本日、皆さんに東京大学憲章と東京大学アクションプランをお渡ししています。東京大学憲章には、全ての構成員が遵守しなくてはならない規範が書かれています。憲章はいわば東京大学の憲法です。一方、東京大学アクションプランは、私の総長任期中、2005年度から2008年度までの4年間に、東京大学をこのように変えたいと私が考えている構想をまとめたもので、いわば東京大学改造計画の設計図です。

憲章は、容易に変えてはならない東京大学の基本価値を示し、アクションプランは、東京大学をこのように変えようという計画ですから、両者は一見対立するようですが、実は相補うものです。あたかも車の両輪のように、一方が他方を必要とするという関係にあります。憲章に書かれた基本価値を実現する

東京大学は今年創立130周年を迎えます。1877年に創設されて以来、東京大学の先輩たちは、欧米の模倣をしつつ、世界の一流大学の仲間入りすることを目指して努力し、今日を迎えました。多くの世界大学ランキングが示すように、東京大学は既に世界の一流大学の仲間入りを果たしています。しかし、これまで目指してきた世界の一流大学の仲間入りを果たすことと、今目指している、世界の知の頂点を目指すことの間には、きわめて大きな違いがあります。それは、追いつくことと先頭に立つことの違いです。他者を効率よく模倣すれば、追いつくことはできます。しかし、模倣では決して先頭に立つことはできません。世界の知の頂点を目指す皆さんにとって、目標は追いつくことではなく、他人を抜いて先頭に立つことでなくてはなりません。

先頭に立つために必要な要素は、分野によって異なるでしょう。研ぎ澄まされた分析力を必要とする分野もあれば、体系的な総合力を必要とする分野もあります。しかし、共通に必要とされるものがあります。それは「先頭に立つ勇氣」です。先頭に立つことは、前人未到の領域に足を踏み入れることを意味します。それは、知力だけでなく、勇氣を必要とすることなのです。本日は、この「先頭に立つ勇氣」について詳しく述べて、皆さんを東京大学大学院にお迎えする歓迎の言葉としたいと思います。

私は、「先頭に立つ勇氣」には、互いに密接に関連する3つの勇氣が含まれると思っています。

第一の勇気は、「孤独を恐れぬ勇気」です。

皆さんが世界の知の頂点を目指すとき、真に挑戦する価値のある問題は、皆さんが解決策を知らないというだけでなく、世界の誰もが解決策を知らない問題です。それこそが最先端なのであって、そのような問題に果敢に挑戦することが研究者の生き甲斐だと、私は思います。

しかし、多くの場合、その挑戦は同時に孤独感との戦いでもあります。世界の誰もが解決策を知らない研究課題だということは、仮に皆さんがそれを解決し、新しい知識を創造することに成功したとしても、その価値を分かってくれる人が、すぐそこにいるとは限らないということを意味します。しかも、学問は細分化しつつあるので、一つの研究者コミュニティの守備範囲は、急速に狭くなりつつあります。したがって、その新しい知識の革新性を評価できるコミュニティが、皆さんの身近に存在するとは限りません。皆さんの指導教員が、そのコミュニティのメンバーである保証すらありません。せっかく大胆な挑戦をし、価値ある知識の創造に成功したとしても、なかなかその価値をわかってもらえない、孤独な時間を過ごさなくてはならない、ということが往々にしてあるのです。

世界の知の頂点を目指す研究者は、この孤独感に耐えなくてはなりません。例えば、アインシュタインの相対性理論は、発表当時、理解できる人が極めて少なかったといわれています。それでもアインシュタインは、相対性理論が理解され、評価されていく過程に立ち会うことができました。しかし、存命中に評価を得られなかった人も少なくありません。例えば、1912年に大陸移動説を発表した気象学者アルフレート・ヴェーゲナーも、その一人です。大陸移動説はプレートテクトニクス理論の礎となった大発見です。しかし、1950年代になってようやく評価を得るに至るまで、ヴェーゲナーは命を永らえることができませんでした。

このように、大きな発見をした人が、発表直後には評価されなかったという事例は夥しくあります。しかし、彼らは孤独感に押しつぶされることなく、自らの正しさを確信し、その発見を既存の知識体系と関連づけていったのです。「孤独を恐れぬ勇気」が「先頭に立つ勇気」の不可欠の構成要素であることを、まず申し上げたいと思います。

「先頭に立つ勇気」に含まれる第二の要素は、「功を焦らぬ勇気」です。

皆さんが研究者になると、研究成果を論文として発表し、世に問うことになります。論文発表は、自らが創造した知識と既存の知識体系とを関連づけるための最も有効な方法です。したがって、私は、皆さんが質の高い論文を多数発表することをおおいに期待しております。

しかし、留意しておいて頂きたいことがあります。それは、論文発表は手段であって、目的ではないということです。論文発表は、皆さんが創造した知識を世界中の人々に理解し活用してもらうための手段です。それはきわめて重要ではありますが、論文発表自体が研究者の最終目的というわけではないのです。そのことを肝に銘じてください。


このように申しますのも、最近、発表論文の数で研究者を評価しようとする傾向が顕著となり、論文発表を手段ではなく目的のようにみなす風潮がはびこるようになってきているからです。論文数第一主義とでも呼ぶべき、こうした発想が支配的になると、様々な弊害が起こるようになります。一部の学術誌がジャンク・ペーパーとも呼ばれる質の低い論文に占拠されはじめているのは、その弊害の一例です。

最も深刻な弊害は、功を焦った研究者が、捏造したデータや再現性が保証されていないデータに基づいて論文を書くという、研究者としての基本ルールに反する行為を行ってしまうことです。まことに遺憾ながら、東京大学も昨年、再現性が保証されていないデータに基づいて論文を発表した教員の処分を行いました。このことは、皆さんもご存知と思います。

世界の知の頂点を目指す皆さんは、功を焦らないでいただきたい。功を焦って、自らの研究者生命を台無しにするようなことをしてはなりません。世界中で一人として解決策を知らない課題に挑戦し、答えを見出すまでには、長い時間が必要です。腰をすえて、本質的な新知識の創造を目指す努力を続けてください。論文数第一主義がはびこる中で、そうしたスタンスを守り続けることは、決して容易なことではありません。それは勇気の要ることなのです。その勇気を、私は「功を焦らぬ勇気」と呼びたいと思います。

さて、「先頭に立つ勇気」の第三の要素は、「他流試合に挑む勇気」です。

他流試合とは、学会やシンポジウムや、その他種々の機会をとらえて自分の研究を発表し、普段の研究室仲間以外の様々な立場の人々と、意見交換や議論をすることを指します。私は、これまで多くの学生を育ててきた自らの体験に照らして、若い研究者にとって他流試合がきわめて重要であることを知っております。他流試合は、若い研究者を確実に成長させるのです。他流試合では、自分と異なる見解に接することになりますが、とりわけ大切なのは、対立する意見と接することです。研究者は、対立する見解と接することで、自らの見解の弱点を知ることができます。それは、自らの見解をより完全なものにするための最良の機会を提供してくれるのです。

対立する意見の接触は、しばしば論争に発展します。論争は、対立する意見の衝突を通じてより高次の真理に到達する 

機会です。ですから、研究者は決して論争を避けてはいけません。

論争は、公開の場で理性的に行うことが、研究者の基本ルールです。未経験な若者にとっては、公開の場で論争することも、感情的にならないで論争することも、共に困難なことでしょう。その困難を乗り越えて、自らの感情を制御しながら公開の場で論争する経験は、若者を、研究者としても人間としても、急速に成長させるのです。その困難を乗り越える勇気が、私の言う「他流試合に挑む勇気」です。

世界の知の頂点を目指す皆さんにとって、他流試合の場は、いうまでもなく世界です。お配りしたアクションプランをご覧頂ければお分かりのように、私は東京大学の国際化を推進しようとしております。その主要な目的は、東京大学を国際的な他流試合の場にしたいと考えるからです。今よりもはるかに多い海外の研究者が本学を訪れて、皆さんとの論争を求める、そういった環境を早く作り出したいと考えています。同時に皆さん自身も、海外に他流試合の場を求め、「他流試合に挑む勇気」をもって積極的に挑戦してください。

学問的他流試合は、社会にとっても重要な意味を持ちます。それは健全な研究者コミュニティの形成に資するからです。健全な研究者コミュニティとは、多様な価値観を持つ研究者が集い、研究の倫理的妥当性について予め真摯な検討を行ない、社会からの謂れなき批判や規制強化の主張に対しては、一丸となって反批判を行う、そういった研究者集団を意味します。健全な研究者コミュニティを作り出すためには、他者の異なる価値観と共存できる寛容な精神を育むことが必要です。皆さんが世界の様々な場で他流試合に臨むことは、異なる価値観との出会いを通じて、それまで自明の前提としていた自らの価値観を相対化する機会を皆さんに提供するでしょう。それは同時に、他流試合の相手方にも同じ機会を提供することになるのです。

他流試合には、いまひとつ重要な効用があります。それは知の構造化を促すのです。現在、研究はますます専門化し、学問領域は日々細分化されています。一方で社会には、地球環境問題に代表されるように、複雑で大規模なメカニズムと多様な側面をもった緊急課題が山積しております。これらの課題は、細分化された個々の学問領域の中で解けるものではありません。学問と社会の関係の現状を、大胆に要約すれば、学問の細分化と社会の複雑化の相克ということができましょう。

知とは本来、さまざまな要素が密接に関係しあう構造的なものです。新たに創造された知識は、他と関連づけられてはじめて、利用可能になります。私は、学問領域を超えて知識を関連づけることを「知の構造化」と呼び、著書を著してその必要性

を説き、さらに学術俯瞰講義をはじめとして、「知の構造化」実現のための試みを東京大学において展開してきております。

「知の構造化」こそ、私たちの眼前に山積する、複雑で大規模なメカニズムと多様な側面を持った課題に挑戦し、解を見出すための大前提であると、私は確信しています。世界規模で展開される学問的他流試合は、研究の専門化や学問領域の細分化という不可避な傾向を乗り越えて、知を構造化するための、貴重な機会を提供してくれるはずで

皆さんはこれから大学院において知の創造に挑戦することになります。真に先端的な課題に挑戦してください。研究者の仕事はしばしば孤独なものです。先端的であるほど、孤独の度合いは深まります。研究の意義が理解されず、成果を得るのに長い時間を要し、その間周囲の冷ややかな目に晒されることにもなりましょう。皆さんは、「孤独を恐れぬ勇気」と「功を焦らぬ勇気」をもって、乗り切ってください。人類の知の境界を広げる作業は、いかに苦しかろうとも、わくわくする、何ものにも代えがたい体験なのです。

そして、「他流試合に挑む勇気」をもって、世界という舞台で展開される他流試合に積極的に参加し、自らを高め、健全な研究者コミュニティの構成員として、その資質を磨いてください。

皆さんが目指すべきは、日本の知の頂点ではありません。世界の知の頂点です。いま皆さんは、そのスタートに立っているのです。何ものにも代えがたい達成感が、やがて皆さんを祝福するであろうことを心から祈りつつ、私の式辞を終えることにいたします。

(平成十九年(2007年)四月五日)



## 第一部 経済学研究科長式辞



経済学研究科長  
植田 和 男

総長が一般的な心構えの話がされたので、さっそく大学院の講義を始めさせていただきます。本年度の担当は経済学研究科の私なので、当然経済学の講義をさせていただくこととなります。皆さんを安心させるために言い換えれば、経済学のある部分を使って総長のお話の例示をさせていただくということになります。

ここ10年前後、学者の政策決定現場への進出が目立ちます。その傾向は特に経済政策の分野で顕著です。私も1998年から2005年にかけて日本銀行の金融政策運営に政策委員として携わるという経験をしました。そのときの経験をお話してみようと思います。

私が金融政策を担当していた時期は、デフレがもっとも深刻だった時期です。デフレというのは多くの物・サービスの価格が継続的に下落する現象を指します。通常、中央銀行はデフレの時には政策手段である短期金利を引き下げて経済を刺激し、インフレの時には逆に引き上げるといことをします。さて、日本銀行にとって困ったことにはバブル崩壊以降の経済低迷の中で、何度も短期金利を引き下げ、本格的なデフレ時期に入る前には短期金利がほとんどゼロになってしまっていたことです。単純に考えれば、金利をマイナスにすればいいわけですが、それはきわめて難しく、常識的な範囲ではそれ以上の政策手段が存在しませんでした。そういう状況の中で、日本の（一部アメリカもですが）経済学者は、とにかく思い切ったことをやれば何とかなるから頑張れ、一点張りの政策提言でした。「勝つまで（デフレが止まるまで）がんばれ」という精神論のみを学者が唱えているという異常な雰囲気でした。

あるいは、金利が下がらないのなら経済に出回っている貨幣の量をとにかく増やせという意見の学者も多く見られました。もちろん、中央銀行が空から1万円札を大量にばら撒けばインフレになるのは明らかです。しかし、現実の世界の中央銀行は民間の金融機関等に資金を貸し付けるという形で貨幣を経済に供給します。貨幣をあげてしまうわけではなく、貸し付ける

だけなので、貨幣を受け取った人たちがお金持ちになって物を買いやすくなるわけではありません。ただ、その過程で金利が下がる。金利が下がると、例えばお金を借りて家を建てようという人が増えて、景気が良くなり物価が上がる。このプロセスで貨幣と物価だけを取り出すと、貨幣が増えて物価が上がっているように見えるわけです。この部分だけを書いてある教科書も多く見られます。しかし、金利がゼロになってしまい、それ以上上がらない状況ではこのメカニズムは働かなくなってしまいます。つまり、いくら貨幣を増やしてもそれだけでは物価は上がらなくなります。現実の経済が、教科書に書いてある理論が対象とする状況からは大きくずれているにもかかわらず、教科書だけをみて政策論を繰り返していた学者たちがたくさんいたということです。

こうした傾向は残念ながら日本の学者に広く見られます。米国の経済理論は、米国の経済を見てそれを説明するような理論モデルとして作られます。日本の学者は、そのような米国の理論モデルだけをしっかりと勉強し、それに関する練習問題のような論文ばかり書く。そのうちに元の論文が対象としていた経済（現象）はどこかへ行ってしまふ。練習問題の答えを、そもそも応用対象としては的外れの日本経済へ適用しようとする。要するに、総長も言われたように、「他人の模倣では本質的な進歩はないし、かえって社会に害を及ぼすような研究ばかり出てくることも」あるわけです。（ただし、大学院生が、最初の第一歩として、既存の理論の練習問題をたくさん解くのはもちろん極めて重要なことです）

先ほどの話に戻って、日本銀行ではわれわれは次のように考えました。確かに、金利がゼロになってしまったら、その時点ですべてで経済にプラスの効果と及ぼすような手段はないかもしれない。当面金利をゼロのままにしておくしかない。しかし、未来永劫に景気がずっと悪いわけではないだろう。何か良いことが起こって輸出や投資が増えて物価が上がりだすかもしれない。そうすると通常なら中央銀行は金利をゼロから引き上げ始めるだろう。すると、そこでは金利を上げない、あるいは少し遅れて上げるという金利調節に関する「自由度」が復活する。景気が良くなって普通なら金利を上げるような局面が数年先に来ても金利を上げない、という意味表示を現在中央銀行が行ったらどうなるだろう。より厳密には、中央銀行が決めるのは通常は短期金利。現在の5年や10年の長期の金利は、現在から向こう5年間や10年間の短期金利の現在における人々の予想値の平均にだいたい等しいことが知られている。数年先には短期金利が上がりだすと思っていたのが、そうはしませんと中央銀行が言えば、現在から将来の短期金利の平均である

現在の5年、10年の金利は下がるだろう。(実際、ゼロになったのはごく短期の金利で5年や10年の金利はプラスで下がる余地が存在した) 短期金利よりは長期の金利に反応する住宅投資等が刺激され、経済や物価にプラスの効果がある。つまり、将来の行動に関するアナウンスメント、約束だけで現在の経済に対する刺激効果が生まれる。(やや厳密さを犠牲にして言えば、短期金利をマイナスにする代わりに、それをゼロにし続ける時間の長さを政策の変数としたわけです)

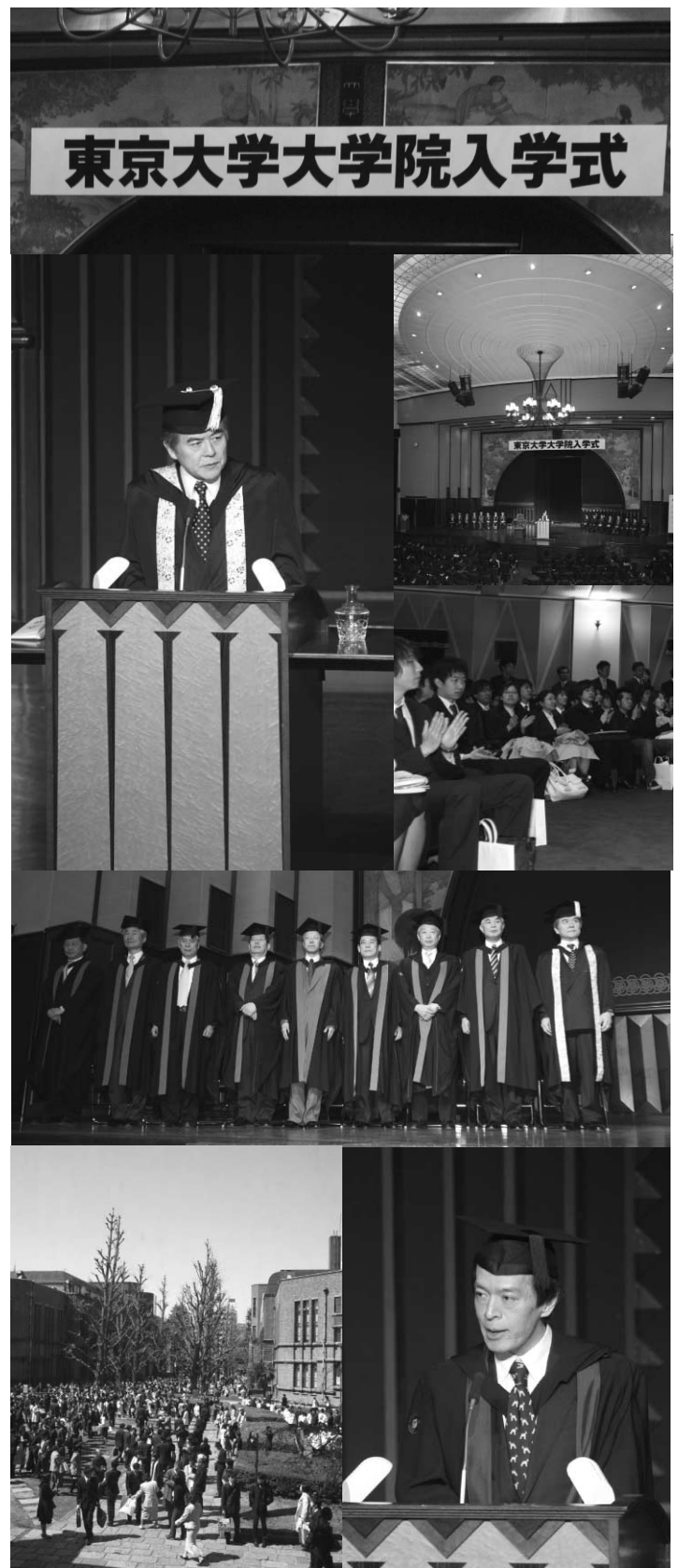
この政策は1999年の春から現実に実行に移され、その後の日本経済をそこそこ下支えしたと思われまます。それはそれとして、学界でのこの政策の評判はどうだったでしょうか。1999年の夏に私がアメリカの有力な経済理論家の論文を読んでいると、驚いたことにこれとほぼ同じアイデアが書かれていました。彼は、日本人の書いた論文を読んでこうした政策を考えたわけではなく、日本の経済に起こっていることを自分なりに真剣に考えてそうしたアイデアにたどり着いたわけです。この論文を読んで私は政策の担当者として自分達の実行していることの正しさが証明されたような気がしてとてもうれしかったのを覚えています。ただし、この論文はあまり人目に付かないところに発表され、大半の日本人の学者の目にも触れませんでしたし、彼らの日本銀行批判にも変わるところありませんでした。

1、2年して先ほどのアメリカ人の学者は、同じアイデアをより厳密な形で学術論文に仕上げ、それが多くの人々の目に触れることになりました。すると日本人の学者の意見も徐々に変わり、日本銀行の政策を理解する人も増えてきました。これは極めて情けない体験でした。多くの人は現実を見るのではなく、学者の世界で権威ある人が何を言っているかをみていたのです。当然のことですが、こういう人たちの間からは真にオリジナルな知見など出てきようがありません。この場合見なくてはいけなかったのは、現実の経済だったり、政策でしたが、より一般的には、それは学問の分野、アプローチの方法等によって多様で、もちろん、他人の論文である場合も多いでしょう。しかしいずれにせよ、考えなくてはならない本来の対象を素直に捉え、それについて真剣に考えることが大事です。日本のことを対象にした研究であっても総長の言われたように、世界規模での他流試合をすることの大切さにもつながる。しかし、これは言うは易く行なうは難しいことです。

日本人の学者の批判をしたように聞こえたかもしれませんが、もちろん、東大には私の言っているような意味で本格的な研究者が多数います。日本の現実や政策に関する議論もきわめて高度なレベルで展開されています。今日はその一例のさわりの

部分をお話した積りです。是非、世界の学界、あるいは社会・経済そのものに大きなインパクトを与えるような研究を志していただきたいと思います。

(平成十九年(2007年)四月五日)



## 第二部 工学系研究科長式辞



工学系研究科長  
松本 洋一郎

入学、進学された皆さん、おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。皆さんの中には、本学を卒業された方、他の大学を卒業された方、外国から来られた方、あるいは社会人の経験をお持ちの方、さまざまな経歴をお持ちの方がおられます。そうした多様な経歴をお持ちの皆さんと一緒に学ぶことを大変嬉しく思っています。

時代も違い、比較にならないかも知れませんが、私が大学院に入学した当時のことを思い出してみましょう。1972年5月に修士課程に入学しました。5月なのは68年から69年にかけての東大紛争の名残です。あなた方には既に歴史の一部になってしまっているかも知れません。当時、この安田講堂は閉鎖されており、このような式典には使われていませんでした。私自身は今でも安田講堂に入る度に、大学を取り巻く社会状況の変化を思い、ある種の感慨を抱かずにはいられません。

さて、大学院入学後しばらくして、ある先輩から、「大学院生だって一生懸命勉強すれば、狭い分野の研究かもしれないけれど、指導教官に負けない成果を挙げられる。頑張ろう。」と言われたのを鮮烈に覚えています。ある意味では、その当時から学問領域の専門化が進み、指導教員といえども全てを把握し切れなくなっていたということだったのかも知れません。私は単純に「僕だって」という気になって、勉学・研究に励んだものでした。

私の専門は機械工学ですが、その分野の第一人者との討論を通じて、最新の知識を獲得するのは嬉しいものでした。さらに、自ら企画・設計した研究によって見出した現象、知見、それらを解析し、合理的な説明が出来た喜びは何物にも変え難いものでした。本来、好奇心が満たされるときには、誰でも喜びを感じ、楽しいと思うものです。特に、研究において、長い試行錯誤を経て、考えに考えた後の「分かった」は快感でしょう。分野の最先端に立って研究を行う楽しさは格別です。別物だと思っていたものが統一的に理解されたとすると、喜びはさらに深まります。その分野の知識も増え、増えた知識により、益々研究は面白くなります。是非皆さんにはこの「分かる、楽しい、

面白い」を学問の場において体現してもらいたいと思います。そのためには、その分野の基礎を大事に、何かの時には立ち戻れるものを持って、じっくりと検討することが重要です。深く研究したことによって身に付けた知識、手法、あるいは「知の技法」は様々なことに応用が利くものです。是非学問の深みに身を沈めて下さい。じっくりと研究を楽しんで下さい。しかしいつも順調に研究が進むとは限りません。数多くの失敗もして下さい。「失敗学」という言葉を聞いた人もいるでしょう。失敗を隠さず、その原因と結果の関連を調べることにより同様の失敗を未然に防ごうというものです。さらに、失敗の体験から、知識・経験・思考が体にしみついたものとなり、血となり肉となって、真の科学的理解を生むことになるのです。失敗を恐れるなど言いたいと思います。大事なのは失敗を謙虚に認め、真実を見極め、誠実な学問を追求することです。

一步一步着実に理解を進め、知識を増やして行くことも大事ですが、俯瞰的に研究を眺め直し、何が真に重要かを理解しておくことは、それにも増して大切です。学術の発展を振り返ると、人類は今までに、様々な知的活動によって得た断片的な知見を、「領域化」と「領域内基本構造」の発見によって「知識」としてきました。「領域化」により知識を深め、蓄積することは人類の発展には必須で、今後も未解決の問題への挑戦が必要であることは言うまでもないことです。その反面、領域化された知識の際限のない細分化と複雑化は、非専門家にとって科学技術の理解を困難にするのみならず、専門家にとってすら専門領域外との連携が困難な状況を生んでいます。そのことは、大量生産・大量消費・大量廃棄の弊害である地球環境問題の深刻化、技術の複雑化・巨大化に起因した事故・災害を引き起こしており、社会的問題を複雑にし、解決を困難にしています。学問に関しても、細分化された専門領域内の活動は、成熟・飽和の段階にあり、個々の専門領域内のみでの飛躍的發展は期待できず、むしろ学際領域における領域融合型イノベーションへの期待が高いと言えます。このためには、個別領域における知識基盤の充実に加えて、領域間を繋ぐことによって知識を構造化し、目的に応じてその知識を活用できるネットワーク型知識基盤を構築することが必須であると考えられます。このような新しい学術の創成には、若く柔軟な頭脳が必要です。あなた方への期待は大きいのです。

“Noblesse oblige”という言葉聞いたことがあるでしょう。「高い身分には義務が伴う」というほどの意味です。今頃あまり流行らない言葉かも知れません。しかし、東京大学が「世界の先頭に立つ」と宣言している今、極めて深い意味を持つと理解して下さい。先頭に立つことは勇気とともに大きな責任と義務を負うこととなります。東京大学は、世界の公共性に奉仕する大学として、国籍、民族等、あらゆる境界を超えた



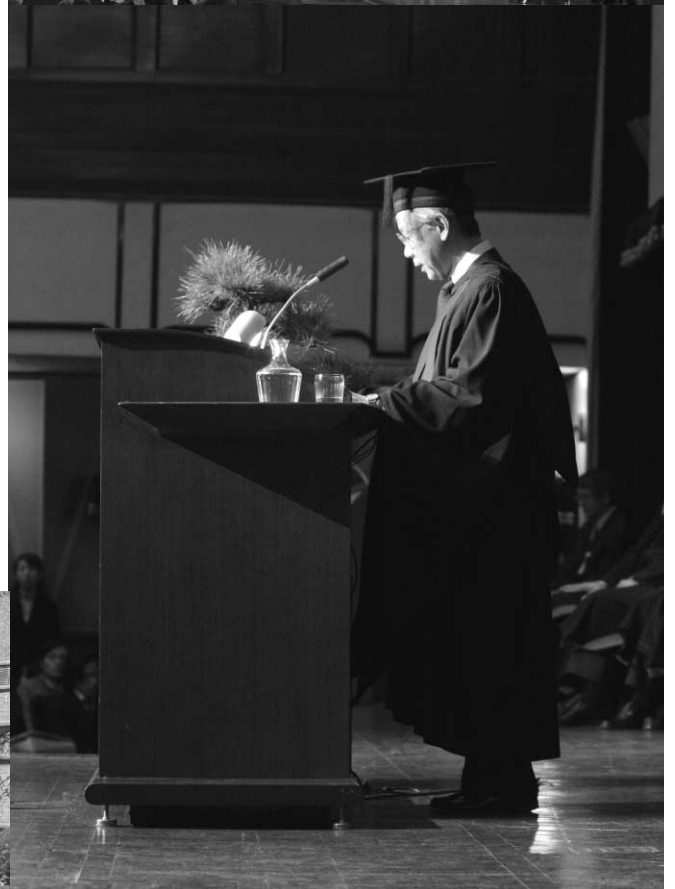
人類普遍の真理を追究し、世界の平和と人類の福祉、人類と自然の共存のために貢献することを宣言し、世界的視野を持った市民的エリートの育成を目指しています。このような社会貢献は主として教育・研究を通じてなされるものです。皆さんには、大学院生として、素晴らしい研究成果をあげて頂き、さらに社会に出て、活躍して頂きたいと思います。

少し話を戻しましょう。現在、学術と生活、社会、つまり学術と人との距離が遠くなっており、社会から学術への無条件の寛容性が無くなり、社会の大学への目には厳しいものがあると思われま。このある種不透明な状況は、大学が社会に対して説明責任を果たすことを困難にしています。しかし、それが学術の現状ですから、私たち自身が、解決に責任を持つべきです。大学というのは自律した個人の集団です。研究者は、主体的、自律的判断に基づいて、確信を持って行動しています。この自律性が学術の発展には不可欠であることを私たちは、歴史の教訓から深く学んでいます。大学という多様性を持った組織体は、小宮山総長が言われるように「自律分散協調系」として存在して初めて、有効に活動できるものです。協調のための最も効果的な方法は、人が交流することです。分野を超えて、互いに交流を深め、理解し合う努力をして下さい。他の研究室のセミナーに出席したり、分野の異なる先生方と議論をしたりと、様々な努力が可能でしょう。分野を越えた協調は、教員よりも、むしろ若く柔軟なあなた方のほうがやり易いと思われま。そして、大学を覆う不透明な状況を打破してくれることを望みま。

どうぞ皆さんの学問領域を深く掘り下げて下さい。そして、「分かる、楽しい、面白い」を実感して下さい。輝かしい研究成果を期待しています。同時に、知を構造化し、俯瞰的立場から部分を全体の中に位置づける試みを行って下さい。最先端の専門知と幅広い視野とを併せもった、知のフロントランナーとなって頂きたいと思われま。

本日は多くのご家族の皆さん、ご関係の方々にもご臨席賜っております。東京大学大学院に進んだ諸君は、本日、私たちとともに、知の高みに向けて出発致しました。どうか、暖かく見守って頂きますようお願いしまして、私の式辞といたします。

(平成十九年(2007年)四月五日)



(特集写真撮影 : 尾関裕士)

# NEWS

## 一般ニュース

研究協力部

「東京大学稷門賞」授賞式を挙

一般

平成18年度後期「東京大学稷門賞」の受賞者が、東京大学医学部鉄門倶楽部創立100周年記念事業後援会様、株式会社アサツー ディ・ケイ様及びドイツ学術交流会 (DAAD) 様の3件3団体に決定し、授賞式が3月26日(月) 17時から山上会館大会議室において挙行された。本表彰は、私財の寄付、ボランティア活動及び援助等により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体(現に在籍する本学の教職員及び学生は原則として対象外)に対し授与するもので、前期、後期の年2回行っている。授賞式においては、選考結果の報告、各受賞代表者への表彰状及び記念品の贈呈があり、その後、総長の挨拶、受賞代表者からの挨拶が行われた。また、授賞式に引き続き、レセプションが行われ、受賞関係者と本学関係者との懇談が和やかな雰囲気の中で行われた。受賞者の授賞理由は以下のとおりである。

### ◎ 受賞者

#### 1 東京大学医学部鉄門倶楽部創立100周年記念事業後援会様

**授賞理由：**鉄門倶楽部の創立100周年記念事業として募金活動を行い、その成果を、医学系研究科教育研究棟14階鉄門記念講堂の設置、同研究科図書の実、大学院学生の奨学金の支援等に活用し、同研究科の研究・教育に貢献

#### 2 株式会社アサツー ディ・ケイ様

**授賞理由：**中国の大学の優秀な卒業生に奨学金等を支給して本学の大学院修士課程に受け入れるための「東京大学アサツー ディ・ケイ 中国育英基金」の設立を全面的

に支援し、本学における中国との学生交流・学術交流の基盤を強化する上で貢献

#### 3 ドイツ学術交流会 (DAAD) 様

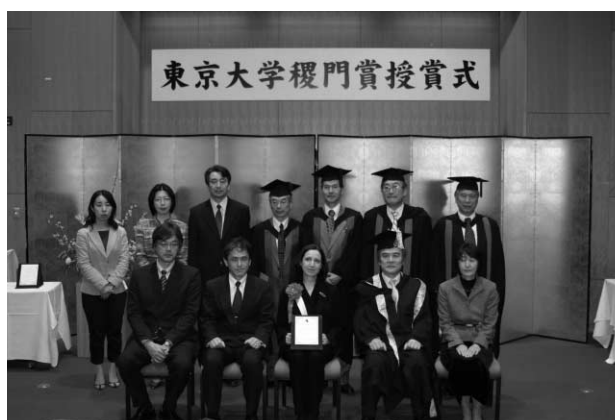
**授賞理由：**総合文化研究科における「ドイツ・ヨーロッパ研究寄付講座(平成12年10月～17年9月)」の設置及び「ドイツ・ヨーロッパ研究センター(平成17年10月～)」の運営を支援し、修士課程「欧州研究」プログラム創設を可能にするなど、本学の研究・教育に貢献



東京大学医学部鉄門倶楽部創立100周年記念事業後援会及び推薦部局関係者、総長との記念撮影



株式会社アサツー ディ・ケイ及び推薦部局関係者、総長との記念撮影



ドイツ学術交流会(DAAD)及び推薦部局関係者、総長との記念撮影



## 国際連携本部

### 第2回日中韓賢人会議、開催される

一般

4月16日（月）、日本経済新聞社、中国の新華社通信、韓国の中央日報の共催で、東京都内において第2回日中韓賢人会議が開催された。中曽根康弘元内閣総理大臣、韓国の李洪九元国務総理、中国の紀宝成中国人民大学学長など30名が集まって、日中韓を中心とする東アジアの政治・経済・文化交流促進について話し合った。

基調講演を含む全体会議では、東アジア共同体や通貨統合を進めることの重要性が討議された。午後の分科会では、小宮山総長が「環境・エネルギー」分科会の座長をつとめ、「日中韓21世紀イノベーション共同機構（仮称）」の構想や、異なる状況にある3国がポスト京都議定書に向けて連携を進める必要性等について活発な討議が行われた。



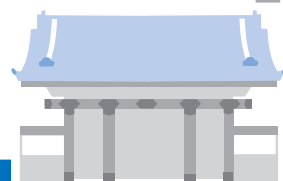
発言する小宮山総長。手前は中曽根元首相

また、分科会の成果を踏まえた全体会議では、稲作など3国の文化的共通性を基軸とした交流促進、アジアの環境事業を支援する「環境ファンド」の創設などが提案された。



全体会議の様子

## 部局 ニュース



### 留学生センター



### 日本語教育集中・特別コース 2006年度冬学期修了証書授与式行われる

留学生センター日本語教育集中・特別コース2006年度冬学期の修了証書授与式が、2月19日（月）15時30分から医学部教育研究棟13階第5セミナー室で行われた。

このコースは、文部科学省から依頼された国費研究留学生（大使館推薦）を主たる対象としつつ、可能な限り一部他の留学生にも門戸を開いて日本語教育を行うコースで、今期は、昨年10月に初級から上級までの合計47名を受け入れて開講、そのうち44名がコースを修了し、修了証書を授与された。

授与式には、古田元夫副学長（理事）をはじめ関係教職員と修了者が出席、古田副学長の挨拶に続き、坂野仁留学生センター長から修了者一人ひとりに修了証書が手渡され、次いで、日本語教育部門主任の菊地康人教授から講評が述べられた。続いて、モッサン・サイドさん（初級代表）、ゴンザレス・ドイトット・エンリケ・サウルさん（中級代表）、李美淑さん（上級代表）の3名の受講生から日本語によるスピーチがあり、約4か月の短い間の日本語のすばらしい上達振りが披露された。楽しいスピーチを聞き、和やかな雰囲気の中に式は終了した。



修了証書授与式の記念スナップ

式終了後、引き続き、山上会館にところを移して、修了者を囲んでの懇談会が行われた。古田副学長は懇談会にも出席され、修了者達と懇談され、ねぎらいの言葉をかけられた。今後は各研究科に分かれて専門の研究に専

心することになる修了者たちは、クラスごとに教員を囲んで写真撮影をしたり、クラスメート同士名残を惜しみつつ歓談するなどして、楽しい時を過ごすうち、閉会となった。

なお、今期の修了者44名の所属は以下の12研究科、出身は以下の22の国または地域である。

【研究科】

法学政治学研究科	3名
医学系研究科	2名
工学系研究科	4名
人文社会系研究科	1名
理学系研究科	1名
農学生命科学研究科	6名
総合文化研究科	4名
教育学研究科	1名
数理科学研究科	2名
新領域創成科学研究科	2名
情報理工学系研究科	5名
学際情報学府	13名

【国または地域】

・中国	10名	・フィリピン	1名
・韓国	5名	・インドネシア	1名
・ブラジル	5名	・マレーシア	1名
・タイ	2名	・パキスタン	1名
・オーストラリア	2名	・ルーマニア	1名
・ロシア	2名	・ポーランド	1名
・イギリス	2名	・リトアニア	1名
・フランス	2名	・スペイン	1名
・モンゴル	1名	・アメリカ	1名
・台湾	1名	・ベネズエラ	1名
・ベトナム	1名	・チュニジア	1名

部局

**医学部附属病院**

**平成19年度入職式及び合同オリエンテーション開催される**

医学部附属病院では、4月2日（月）9時から安田講堂において、4月1日付けで新たに職員となった看護師、検査技師、臨床研修医、事務部の新規採用者を対象に入職式及び合同オリエンテーションを開催した。

当日は、450名を超える新入職員が新たな希望に胸を膨らませて、会場に集まった。

入職式では各職種の代表者に武谷雄二病院長から採用通知が交付され、新たに医療人として職務に当たるための心構えについて挨拶が述べられたのに続いて、榮木実枝看護部長から新入職員へ歓迎の挨拶が述べられた。



武谷雄二病院長挨拶

入職式に引き続き、合同オリエンテーションが同会場で行われた。榭山博副院長・事務部長から「病院の概要について」、榮木看護部長から「看護部紹介」、北村聖総合研修センター長から「チーム医療について」説明が行われた。また病院職員として必ず遵守しなければならないインフォームド・コンセント、医療安全、感染対策、個人情報保護、患者相談と臨床倫理の取り決めについて、各センター及び委員会の責任者から説明が行われた。午後からは各部の紹介等が行われ、出席者全員が最後まで真剣な眼差しで説明を受け、17時に会を終了した。



真剣な眼差しで説明を受ける新入職員

なお、本年度から新入職員が医療安全や感染対策、医療の質向上等、本院における職務に1日も早く慣れ、それぞれが持つ力を発揮出来るよう一定期間、共通の「フレッシュマーク（バッジ）」を付けることとした。



フレッシュマーク

4月6日（金）、教育学部附属中等教育学校において、平成19年度入学式が行われた。

式場の窓から少し緑が混じった満開の桜が、第62回生120名を迎えた。

来賓には、金子元久教育学部長をはじめ、同窓会・PTAなど学校を支えてくださる方々が多数お見えになり、管弦楽部の快い演奏の中での温かな入学式となった。

衛藤隆学校長は、この中等教育学校での6年間を山登りにたとえ、「一步一步確実に前に進んでいって欲しい」と祝辞を述べた。また、保護者の方々に対しては、三者協議会という本校の特色を述べ、参加を呼びかけた。

金子元久教育学部長からは、東京高校から始まる本校の歴史と、現代的意義のある教育の場としての附属学校の特色を話された。そして、「自分のやりたいことは何かをはっきりさせること。日々の努力を怠らないこと。この二つを目標に個性を伸ばしてほしい」との心強い祝辞をいただいた。

在校生からは生徒会長の5年松原匠君が先輩としてこの学校の生徒としての心構えを話し、新入生からもA組の日比野隆弘君がこれからの抱負を述べた。これからの6年間での成長を期待したい。

※「第8回入学式」と「62回生」について

2000年度に「東京大学教育学部附属中学・高等教育学校」が「東京大学教育学部附属中等教育学校」となりました。「第8回」とは、中等教育学校になってからの回数です。また、62回生とは、1946年度の1回生（前身の旧制東京高等学校尋常科3年生）からの回数で、今年の入学生は「62回生」となります。



入学式の呼名の様子

明治20年4月1日、帝国大学臨海実験所として発足した理学系研究科附属臨海実験所（通称三崎臨海実験所）は120周年を迎えた。富国強兵を目指していた明治時代に、海産動物学という基礎学問を、世界に先駆けて日本で始めた東京大学の先人たちの先見の明に驚かされる。

4月7日（土）、臨海実験所ゼミナール室に於いて、今後の三崎臨海実験所のあり方を議論する記念シンポジウムが開催された。文部科学省から来賓を迎え、最初に、磯野慶應義塾大学名誉教授が120年の歴史を振り返り、赤坂甲治所長が現在の活動と、今後の取り組みについて述べた。続くシンポジウムでは、本学から岡村定矩理事・副学長、山本正幸研究科長らが出席し、関連各学会の会長を交えて活発な議論が展開された。

三崎臨海実験所が面する相模湾は、世界的にも稀な豊かな生物相を誇り、多様な海洋生物を活かした研究業績は高く評価されてきた。また、本学の他部局や他大学、国外からも利用があり、年間延べ1万人を超える研究者・学生が活動している。今回のシンポジウムの議論の中心は、その規模にあった。利用人数に比べスタッフが少なく職務の負担が重いこと、国内では質・規模とも他の追随を許さないが、欧米に比べると圧倒的に規模が小さいことである。欧米では、海洋生物から医学・工学にも応用されるノーベル賞級の研究が多数生まれていることが理解され、国を挙げて海洋生命科学を支援している。海洋生物学の最前線基地である臨海実験所の将来像を、本学のみならず、日本学術会議、関連学会においても議論していく必要があるとの認識で一致した。



パネリスト



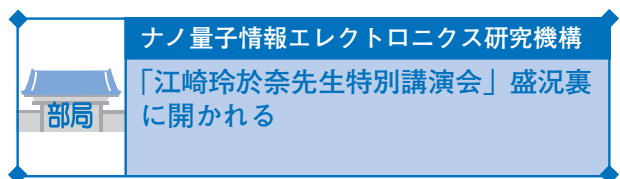
シンポジウム会場

所内見学では、100名を超える出席者が、最新の設備を誇る新研究棟の他、明治時代の木造の建物、昭和初期の鉄筋コンクリート2階建ての旧本館など、歴史的建物を見学した。また、日本財団の助成により17年度に再建された木造和船の試乗を楽しんだ。

※当臨海実験所では公開の自然観察会及び実習が開かれています。豊かな海の自然を楽しんではいかがでしょうか。申し込みは<http://www.mmbs.s.u-tokyo.ac.jp/>をご覧ください。



所内見学 木造和船「みさき」の試乗



ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構は4月9日(月)17時から駒場リサーチキャンパスの生産技術研究所コンベンションホールにおいて「江崎玲於奈先生特別講演会」を開催した。本機構が発足以来、毎月開催する「ナノ量子情報エレクトロニクス公開セミナー」の一環として開催したもので、今回は機構が推進する先端融合COE「ナノ量子情報エレクトロニクス連携研究拠点」プロジェクトの諮問委員長も務める江崎玲於奈先生が今年1月に日本経済新聞に「私の履歴書」を執筆したのを機会に、研究エピソードなどについて、直接、伺う趣旨で企画された。

講演会は荒川泰彦機構長の司会で始まり、岡村定矩理

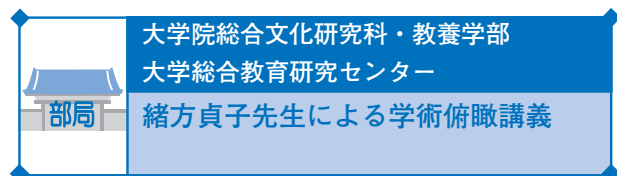
事・副学長の開会挨拶の後、江崎先生が「私の研究歴50年の歩み MAVERICK (個に生きる)」と題して講演。貴重な写真や資料をふんだんに駆使しながら、後進に託すメッセージを含め約90分もの熱演となった。定員約260名の会場は満席となり、立ち見が出るほどの盛況ぶり、最後に前田正史生産技術研究所長が締めめの挨拶を行い、終始熱気に包まれた講演会を終了した。



終始にこやかに講演する江崎先生



熱心に聞き入る満席の聴衆



2007年度夏学期の学術俯瞰講義は、火曜日5限に「社会から見たサステナビリティー平和・開発・人権」が、木曜日5限に「数理の世界ー新世紀の数学を探る」が開講している。「社会から見たサステナビリティ」の第1回目の講義は、新入生歓迎講演会も兼ねた形で、現在、国際協力機構理事長であり、国連難民高等弁務官も務められていた緒方貞子さんを講師としてお招きし、4月10日(火)に行われた。この日は、講義の始まる1時間以上前から講義室の前に学生が集まり、数理科学研究科の大講義室、ならびに同時中継を行った900番教室は超満員となり、緒方先生のお話への興味そしてこのテーマに関する学生の問題意識の高さが表れていた。

講義は「人類社会の将来」と題して、グローバル化の浸透とともに、国家が人々の必要とする保護と安全を十分提供することができない時代となった中で、人々にフォーカスした安全保障、社会・経済開発の政策的展開についてのお話しであった。グローバル化に伴い、

ヒト、モノ、カネ、情報が国境を越えて移動し、多くの可能性が生まれると同時に、多くの不安も生み出している。そのような中で国家や国際組織の果たす役割は何なのか。経済中心ではなく人間を中心に考えた「人間の安全保障」の定義とその実現について、平和維持から平和構築への移行や紛争後の平和構築がいかに困難であるか、その中心となるキーワードは「公正な社会の実現」であることなど、ご自身がルワンダの虐殺、ユーゴスラビアの紛争、アフリカ諸国の貧困や内戦などを通じて活動し実感されたことをお話しになった。



講義風景

また、現代社会は、これまで受験勉強をしてきたような正しい答えがあるものではなく、答えのない世界であり、大学生活の中で新しい答えを探して行って欲しい、とこれから新たに大学生活をスタートする新入生へのメッセージも頂いた。

学生からは日本が世界の中で果たすべき役割や、日本のODAについて、紛争の解決についてなど、積極的に多くの質問があった。

2回目以降の学術俯瞰講義は、「持続可能な平和の課題（佐藤安信教授）」、「持続可能な開発の課題（中兼和津次名誉教授）」、「国際人権保障の課題（岩沢雄司教授）」、「アフリカに見る問題の噴出（山影進教授）」を通して、人類社会にとってのサステナビリティについて俯瞰していく。

## 地震研究所



### UT購買サイトシステム講習会を開催

地震研究所では4月13日（金）、技術職員、短時間勤務有期雇用職員（事務補佐員）を対象にUT購買サイトのシステム講習会を開催した。UT購買サイトはカタログ作成から発注～受注～検収まで一連の調達業務をパソコンからインターネット経由で実施し、経費削減、業務効率化を実現するため、本学が平成18年度から取り組んでいるもので、既に学内の多くの部局で利用されているシステムである。



講習会の様子

地震研究所では、4月1日付け人事異動等による新規職員や本システムに慣れていない職員、利用方法や概要を理解していない職員の為に、少人数で実務的な講習会を開催したものである。本講習会には技術職員や事務補佐員、事務職員など約25名の参加があり、各自のパソコンを操作しながら実践での作業体験を受講した。



UT購買サイトの概要説明を行っている  
藤原係員（右）、ヘルプデスクの鈴木氏（左）



質問に答える櫻井係長

本講習会には本部事務から櫻井調達企画チーム係長、藤原係員及びヘルプデスク鈴木氏を講師としてお願いした。講習会はまず、藤原係員からUT購買サイトの概要についての説明後、鈴木氏から具体的なシステムについての作業の説明が行われた。実際にパソコンを扱いながらの講習会であったため、受講者から作業上の質問は特になく、1時間半という短時間のうちに全員がスムーズに入力できるようになり、無事に終了した。その後システム全体について質疑に入り、①システム環境、特にマックの利用が可能か、②今後のシステム改善の方向性は

どうか、③もっと画面上で使い易い方法はできないか等の質問があり、また、講師からは、カタログ外の発注についても現在利用者サイドで簡単に利用できる方法について検討中である旨の報告があった。全体で約2時間という短時間での講習会ではあったが、受講者はUT購買サイトシステムの入力や概念を十分に理解された様子であった。今後の利用が期待される感触を得て終了した。

最後に事務長から、来たる4月26日(木)には「UT購買サイト等の構築の基本方針」と題して本部調達・経理系三浦統括長から説明をいただく事が紹介され、本システム講習会と一体的にとらえられるため、是非参加されるよう要望された。

※なお、本説明会は地震研究所教授会構成員及び全教職員を対象として実施する予定です。



**学生部**  
**平成19年度進学指導担当教員、決まる**

教養学部(前期課程)から専門分野へ進学しようとする学生に対し、進学に関する諸問題について個人的な指導や相談にあたる今年度の進学指導担当教員は、次のとおりである。

平成19年度進学指導担当教員名簿

平成19年4月現在

学部	進学指導担当学科	職名	氏名	連絡先(内線)
法	全類	教授	木庭 顕	23259
医	医学科	教授	栗原 裕基	23495
	健康科学・看護学科	教授	數間 恵子	23506
工	社会基盤学科	准教授	中井 祐	26134
	建築学科	准教授	西出 和彦	26168
	都市工学科	講師	大森 宣暁	26232
	機械工学科	教授	丸山 茂夫	26421
	産業機械工学科			
	機械情報工学科	教授	廣瀬 通孝	26367
	航空宇宙工学科	教授	李家 賢一	26585
	精密工学科	教授	新井 民夫	26457
	電気工学科	准教授	古関 隆章	26676
	電子情報工学科	准教授	苗村 健	26668
	電子工学科	准教授	池田 誠	26661
	物理工学科	教授	樽茶 清吾	26835
	計数工学科	教授	杉原 正顯	26955
	〃	教授	嵯峨山 茂樹	26900
	マテリアル工学科	教授	小関 敏彦	27110
	応用化学科	准教授	下山 淳一	27705
化学システム工学科	教授	大久保 達也	27348	
化学生命工学科	教授	小宮山 眞	55200	
システム創成学科	准教授	青山 和浩	26504	



文               理	全学科	准教授	唐 沢 かおり	23853
	数学科	准教授	河 澄 響 矢	47031
	情報科学科	教授	辻 井 潤 一	24098
	物理学科	教授	佐 野 雅 己	24188
	天文学科	教授	野 本 憲 一	24255
	地球惑星物理学科	准教授	小 池 真	24595
	地球惑星環境学科	准教授	池 田 安 隆	24574
	化学科	教授	長谷川 哲 也	24353
	生物化学科	教授	深 田 吉 孝	24381
	生物学科（動物学）	教授	岡 良 隆	24438
	生物学科（植物学）	教授	寺 島 一 郎	24465
	生物学科（人類学）	講師	井 原 泰 雄	24483
	生物情報科学科	教授	黒 田 真 也	24697
	農	応用生命科学課程		
生命化学・工学専修		講師	大 塚 重 人	25176
		准教授	石 井 正 治	25143
応用生物学専修		教授	岸 野 洋 久	25066
森林生物科学専修		教授	富 樫 一 巳	25217
水圏生命科学専修		准教授	金 子 豊 二	25286
動物生命システム科学専修		准教授	内 藤 邦 彦	25195
生物素材化学専修		教授	松 本 雄 二	25262
環境資源科学課程				
緑地生物学専修		准教授	大 黒 俊 哉	25049
森林環境資源科学専修		准教授	古井戸 宏 通	25233
水圏生産環境科学専修		教授	松 永 茂 樹	25297
木質構造科学専修		准教授	稲 山 正 弘	25252
生物・環境工学専修		教授	大 政 謙 次	25340
農業・資源経済学専修		教授	泉 田 洋 一	25463
フィールド科学専修		准教授	岡 本 研	28921
国際開発農学専修		教授	鈴 木 宣 弘	27533
経		獣医学課程		
	獣医学専修	准教授	望 月 学	25406
養	経済学科	准教授	大 橋 弘	25511
	経営学科			
育 薬	超域文化科学科	教授	山 田 広 昭	44814
	地域文化研究学科	教授	石 田 勇 治	46340
	総合社会科学科	教授	中 西 徹	46462
	基礎科学科	准教授	前 田 京 剛	46747
	広域科学科（広域システム）	教授	山 口 和 紀	46677
	（人文地理）	教授	松 原 宏	46254
	生命・認知科学科	教授	丹 野 義 彦	46265
総合教育科学科	教授	金 森 修	23963	
薬学科・薬科学科	教授	松 木 則 夫	24780	

備考：連絡先電話番号

本郷（ダイヤルイン） 5 8 4 1 - （内線番号の下4ケタ）  
 駒場（ダイヤルイン） 5 4 5 4 - （内線番号の下4ケタ）  
 駒場・数理（ダイヤルイン） 5 4 6 5 - （内線番号の下4ケタ）  
 例）内線2〇〇〇〇の場合 → 5 8 4 1 - 〇〇〇〇



## インタープリターへの長い道のり

石浦章一

総合文化研究科教授  
科学技術インタープリター養成プログラム担当

科学技術インタープリターを養成するのは、なかなか大変である。もともと、東京大学の大学院に入るような方には、実際自分がやっている研究の他に副専攻として本プログラムを履修するのであるから、少しは能力らしいものと気概が必要であるのだが、どうやら気概も能力も同様学習によって出てくるらしく、このたび修了した1期生の中には、数人、これはといった学生がいたので大変嬉しい思いをした。実は、1期生の入学試験の時には、この程度かと落胆していたのであるが、ご協力いただいた先生方と本人たちの研鑽の甲斐あって、多くの知識と行動力を得てくれたことに感謝したい。

驚いたことに受験者の中には、数ヶ月ですぐに作家になれるように勤違いをする者もいたようだが、これは後期課程あたりで能力がないのに医学部や法学部に再受験しようとする学生がうじゃうじゃいる(理由を聞いてみたら、楽に生活ができるからだ!)のと同様、東大生のバカさ加減の表れで、少々寂しい気がしたものである。

1年半たって考えたことは、やはり東京大学には実際にインタープリターとして活躍されている先生方が、どこの大学よりも多くいるので、その方々の動きを見るのが一番いいのではないかと、ということである。残念ながらもうお辞めになったが前代表の松井孝典さんはいつどのような方法で冥王星の情報を仕入れているのか、黒田玲子さんは忙しくて講義をする時間もないはずなのにきちんと講義もし、我が国の教育の実際をどこで見聞きしどう政策に生かそうとしているのか、私がこのような文章を朝8時前に来て書いているのを見てくれ(うちの研究室の誰も知らない)、...

もともとは、能力が有り余っている人のためのプログラムなので、自分の研究で精一杯の大学院生には無理なのは当然である(賞状だけがほしい人は来ないでくださいね)。私たちは、どれくらいこのような方がいるかわからなかったのであるが、本郷からも柏からも遠征してきてくれる学生がいるということは、インターディシプリナリーな方向を持つ学生がいるのは駒場だけではないということがわかり、大変心強い。アタマと腕と体力に自身のある院生の皆さん、是非、9月の受験にどうぞ。

★科学技術インタープリター養成プログラム  
URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

## 調達本部です



### 第26回 調達本部18年度活動報告

平成18年度、調達本部2年目の活動報告です。「UT購買サイト」の立ち上げ、「清掃・警備」はサプライヤーの一元化・契約の複数年度化、「修繕」はマッチング方式を導入するなどの新たな取り組みによる効果も含め、約4.5億円の節減を図りました。

(単位:千円)

区分	調達品名	前回契約額 当初見積額	18年度 契約額	節減額	節減率
事務用品	事務用品(UT購買サイト)	51,928	41,057	-10,871	-20.9%
図書	全学資料購集中処理システム	256,533	246,673	-9,860	-3.8%
清掃	本郷地区屋内清掃	191,277	134,400	-56,877	-29.7%
	駒場・中野・白金台地区屋内清掃	79,511	63,000	-16,511	-20.8%
	その他5件	399,990	385,695	-14,295	-3.6%
	計	670,778	583,095	-87,683	-13.1%
警備	本郷地区建物内警備業務	59,137	56,256	-2,881	-4.9%
設備保守	安田講堂他設備等保全業務	68,349	53,858	-14,491	-21.2%
	東京大学内設置昇降機保全業務	176,364	168,008	-8,356	-4.7%
	計	244,713	221,866	-22,847	-9.3%
修繕	法文2号館他空調設備改修	17,955	8,873	-9,082	-50.6%
	大講堂耐震診断	21,357	11,434	-9,923	-46.5%
	駒場保健センター改修工事	29,400	17,850	-11,550	-39.3%
	病院前道路舗装改修工事	28,308	19,425	-8,883	-31.4%
	その他24件	1,153,320	1,049,223	-104,097	-9.0%
	計	1,250,340	1,106,805	-143,535	-11.5%
印刷	21世紀COEプログラム探訪集	3,500	1,249	-2,251	-64.3%
	研究報告書Bulletin No.43	2,000	945	-1,055	-52.8%
	広報誌(淡青19号)	2,609	1,327	-1,282	-49.1%
	その他24件	82,855	71,037	-11,818	-14.3%
	計	90,964	74,558	-16,406	-18.0%
移転	病院新中央診療棟Ⅱ期移転	45,486	7,277	-38,209	-84.0%
	地震研究所移転	18,087	3,768	-14,319	-79.2%
	新領域移転	100,000	24,855	-75,145	-75.1%
	その他6件	50,345	28,437	-21,908	-43.5%
	計	213,918	64,337	-149,581	-69.9%
その他	電話	29,160	27,660	-1,500	-5.1%
18年度合計		2,871,849	2,422,307	-445,174	-15.5%

19年度の節減目標額は10億円です。「UT購買サイト」は懸案のMac対応が可能となりました。「UT試験サイト」は本格稼働します。「印刷」も本部で作成した見積統一フォーマットの活用等による効果が期待されます。19年度は本部と部局、二人三脚で目標達成といきたいですね。

調達本部連絡先 ☎21201 櫻井

## 知的財産部からのお知らせ

### 発明等取扱規則実施細則の改定

2月28日（水）から発明等取扱規則実施細則が一部改定されました。この改定により、この細則で定められた発明等の届出書の様式等が変わりました。

今後の発明届提出では、改定後の様式を使用いただくようお願いいたします。

今回の主な改定内容を以下にご紹介します。詳細については下記ホームページに掲載していますのでご覧ください。

[http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/chiteki/hatumei\\_kaitei.html](http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/chiteki/hatumei_kaitei.html)

#### 1. 発明等の届出時の代表届出者選出

届出書における代表届出者は、最も発明に寄与した者として考えられることがありました。この考えでは、ある発明に対して大学と雇用関係の無い学生の寄与が最も大きい場合、その学生が発明届を提出する際、「職務関連発明でない」として届けることになるため、発明者に大学の教職員等が含まれていても、その教職員等につき職務関連発明として判定を行うことができません。

今回の改定では、発明者に教職員が含まれない場合を除き、原則として代表届出者は教職員から選ぶことを明記しました。

代表届出者には、知財部からの諸通知や検討依頼事項等、本届出に関する連絡の窓口になっていただきますので、この観点からの選出をお願いします。

#### 2. 学外者による発明等の持分の譲渡

学外発明者からの権利譲渡手続きを実態にあった運用にするとともに、学外発明者に対しても守秘義務等につき注意喚起するため、学内の発明者用のものと統合した新様式に改定しました。

#### 3. 発明等の届出書の「(旧)事業化推進の希望相談先」

従来は、「事業化推進の希望相談先」として発明者が東京大学エッジキャピタル（UTECH）を希望する場合にチェックを記入するものでした。

この欄を「事業化可能性の検討」として、この検討をUTECHが行うためにUTECHへ発明情報を開示することの承認・不承認につきチェックを入れるようにしました。これにより、発明者の同意を得た上で、事業化可能性をUTECHが検討する可能性を広げることになりました。

連絡先: 産学連携本部（研究協力部 産学連携課）

電話: 内線22857（外線03-5841-2857）

ホームページ: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

※「東京大学トップページ」上で「産学連携本部」をクリック

## 「東京大学アントレプレナープラザ」がいよいよ竣工、6月にオープン

### 大学発ベンチャー支援施設内覧会のお知らせ

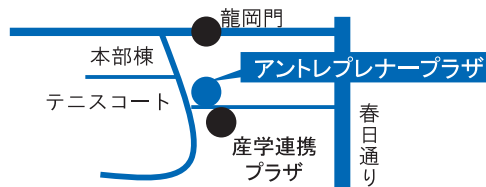
産学連携プラザ隣接地に建設中の大学発ベンチャー支援施設「東京大学アントレプレナープラザ」がいよいよ5月に竣工し、予定通り6月から開業することになります。

昨年（2006年）10月から入居ベンチャー企業の募集・選定作業を進めてまいりましたが、施設の完成を機に、施設の存在の更なる周知を図るため、学内教職員向けの施設内覧会（見学会）を下記の通り行うことになりました。

★「東京大学アントレプレナープラザ」内覧会★

＜日 時＞5月22日（火）13:00～16:00

＜施設場所＞産学連携プラザ隣り（地図参照）



※学内教職員の紹介があれば、東京大学関連のベンチャー企業の方々も見学できます。お問い合わせは下記までお願い致します。

◇メール: [eplaza@ducr.u-tokyo.ac.jp](mailto:eplaza@ducr.u-tokyo.ac.jp)

◇電話: 内線21489

### Proprius21(金融機関版)のご案内

平成17年度、東大と民間等との共同研究において、中小企業との件数、研究費はそれぞれ、12%、19%でした。

当本部は、関心をお持ちの研究者がおられれば産学連携に発展するようお繋ぎしたい所存ですが、「数多くの現場の問題を受け止める体制が十分でない」、「研究テーマとして取り組めるか検討に時間を要する」等の点から、現実的には、全てのご相談に対応することには限界がありました。そこで、【中小企業の個別課題について、東京大学がどのような形で貢献できるか】について、4金融機関と研究会を開催し、そこでの議論を踏まえて、Proprius21(金融機関版)を設計し、金融機関と連携して、その顧客である研究開発志向中堅企業の有する課題について産学連携の可能性を検討するというプログラムを開始しておりますので、ご案内申しあげます。

◇産学連携本部、JST共催 「JST Innovation Bridge～東京大学バイオエンジニアリング編～(仮称)」

＜日 時＞6月13日（水）10:00～17:30

＜場 所＞山上会館2F 大会議室

＜交流会＞山上会館 談話ホール 18:00～20:00

産業界のパートナーと連携して、JSTシーズイノベーション化事業（顕在化ステージ800万/年、育成ステージ2億円/年）に応募するものです。産学連携のパートナーをご希望の方はご連絡ください。

## ワタシのオシゴト 第12回

Rings around the UT

生産技術研究所  
事務部経理課 連携研究支援室執行チーム

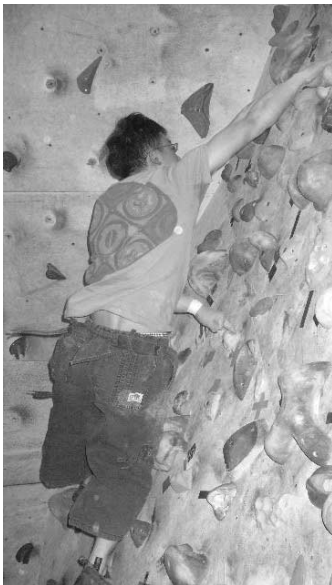
新井宏之さん

## 外に目を向けて

僕は東大職員に採用されてからまだ4年目で、生研から外に出たことはありませんが、実は経理課内では毎年担当が変わっています。司計から監査、旅費給与と渡り歩き、現在は外部資金の経理を担当しています。

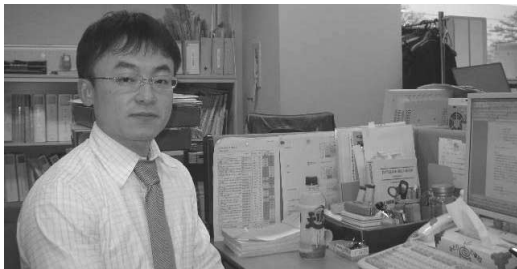
現在の部署に異動してまず驚いたのは外部資金の多様さとそれに伴う規程や処理方法もばらばらなことです。同じ相手先なのに担当部署によってやり方が違ったり、前例を参考に処理していると知らぬ間に規程が変わっていたりして油断が出来ません。今はそれを把握するのに精一杯でしょっちゅうテンパってますが、毎日が発見の連続で飽きることがありません。

そして今一番実感しているのが説明責任の重要性です。外部資金については検査等で学外の人に説明する機会も多く、対外的に如何に説明が出来るかが重要だと考えています。そのため普段から検査で質問を受けた場合にどう回答するか、そしてそのためにどんな資料が必要かを念頭において仕事をしています。



**出身地:** 埼玉県  
**自分の性格:**  
まじめなんだけど、すごく肝心なところが抜けている。  
**血液型:** A型  
**次回執筆者のご指名:**  
山口剛さん  
**次回執筆者との関係:**  
残り少ない同期会の主要メンバー  
**一言紹介:**  
明るそうに見えるけど実は意外と根暗？  
歌が本当に上手いです。

趣味のフリークライミングをしているところ。白黒だと分からないと思いますが真っ赤な顔をして登っています



職場にて、整理整頓は苦手です・・・

☆バーチャルツアー☆  
安田講堂と大壁画

本日は、バーチャルツアーにご参加いただきありがとうございます。文字数に限りがありますので、さっそく始めま〜す！

え〜、安田善次郎氏が、当時の東京帝国大学に卒業式やその他式典の際、講堂や便殿（ピンデン：天皇・皇后両陛下の休息室）がないと知り寄附されたことから、安田講堂と言われます。大正14(1925)年7月の竣工です。

え〜、安田講堂の正面玄関は、階数では3階になります。なので講堂の2階席は4階です。これは崖の高低差を利用して建てられているからで、横から見るとよく分かります。車寄せ部分でうまくつながっています！後ろは亀が甲羅を背負っているような格好ですよ。あまり前後を意識したことはなかったのですが、意外なかたちをしていますね。

それでは！黒塗りの鉄の扉を開け、正面玄関から講堂の内部へ入ってみましょう！少し薄暗くて、なにやら重厚な空気が流れています。登録有形文化財の貫禄でしょうか？それとも80余年の歴史でしょうか？

つき当たりに見えますのは、画家・小杉未醒(セイ)の壁画『動意(ドウイ)』です。この階の上、同じ場所には『静意(セイイ)』が掛けられています。<『動意』は馬にのった少年。『静意』は水辺に寛ぐ女性を描いています。>鑑賞したら、廊下を右手(または左手)へ歩いて奥へ進みましょう。木製の扉を開けてみると...わあ〜ッ、客席が広がっています。その数は上下階で1,144席です。どうぞ座って正面の舞台をご覧ください。タテ約6m・ヨコ約12mの大壁画が目飛び込んできましたね！先程の小杉未醒の作品で、向かって左を『湧泉(ユウセン)』、右を『採果(サイカ)』といいます。<『湧泉』には画面上方に、泉のそばで寛ぐ二人の天平風俗の乙女と二人の少年が描かれ、画面下では、乙女が牛に水を飲ませようとしています。>

<『採果』の画面上方、左に笛を吹く少年とそれに聞き入る二人の乙女を配し、右に恵みの葡萄を摘み取る少年と乙女、薬草を摘む老人が描かれています。>

泉から湧き出る水を汲み、実った果実を摘むという構図は、「研究から成果」「入学から卒業」という意味があらわされているんだそうです。なるほど、聞いてみると納得できますね、ハイ。また、壁画全体の色目は、抑えた緑と黄色を主調としているそうですよ。

〜いかがでしたか？次はどこへ行きますでしょうか!?!〜

◇安田講堂は現在、講演会、卒業式、五月祭などで使用されていますが、残念ながら通常はなかを見学できません。講堂内に入りたいという方、とくに一般の方には、公開講座などへのご参加をお勧めしています。

◆参考文献：『東京大学史紀要 第9号』(1991年3月) / 林洋子氏  
『東京大学・安田講堂内壁画について—小杉未醒と藤島武二の試み—』  
<>で括った説明も、↑こちらを引用させていただきました。



# INFORMATION

## シンポジウム・講演会

### シンポジウム・講演会

大学院理学系研究科・理学部 大学院総合文化研究科・教養学部

#### 地球惑星科学公開シンポジウム 「地球惑星科学と社会」

地球惑星科学系学科では、教養学部の学生に地球惑星科学のおもしろさを知ってもらうために、毎年シンポジウムを開催しています。本年は、テーマを「地球惑星科学と社会」として、本学地球惑星科学系教員による最新の研究トピック紹介に続き、ベストセラー『理系白書』著者による特別講演を行います。教養学部生だけでなく、広く大学生、高校生、一般の方々に公開（参加無料）しています。多くの学生、皆さまのご来場をお待ちしています。

日時：5月10日（木）18:00～20:00

場所：駒場キャンパス16号館

#### 第1部 講演「地球惑星科学研究の最前線」

メタンハイドレート：新しいエネルギー資源

松本 良（地球惑星科学専攻 教授）

巨大地震発生領域の下で進行している未知の地震的現象

井出 哲（地球惑星科学専攻 講師）

地球温暖化予測と気候システムの理解に向けて

阿部彩子（気候システム研究センター 准教授）

#### 第2部 特別講演

「私たちの将来と地球惑星科学」

田中泰義・元村有希子（毎日新聞科学環境部）

#### 第3部 学科紹介（学科学生）

理学部 地球惑星物理学科、地球惑星環境学科

教養学部 広域科学科

### シンポジウム・講演会

大学院総合文化研究科・教養学部

#### 「東京大学の英語教育—改革の道程と今後の展望 Teaching English at Komaba」開催のお知らせ

教養学部では、前期課程カリキュラムの見直しを行い、平成18年度から実施しています。これは平成5年度以来の大きな改革です。1、2年生を対象にする英語の授業についても大幅な改編を行い、英語Ⅰを縮小する反面、英語Ⅱについては、リーディング、プレゼンテーション、コンプリヘンションという三つの柱を立てて、一層の充実を図りました。とくにオーラル・プレゼンテーションの授業は特筆すべき試みです。こうした教養学部英語部会の取り組みを紹介し、あわせて駒場の英語教育のあるべき姿を話し合うべく、公開のシンポジウムとワークショップを企画しました。広く一般の方にも公開いたします。

#### ●日時・会場

5月25日（金）12:30～17:30

駒場Ⅰキャンパス18号館

18号館ホール（1階）

コラボレーションルーム1（4階）

#### ●プログラム

総合司会	アルヴィ宮本なほ子准教授
挨拶	大学院総合文化研究科副研究科長 長谷川壽一教授

#### 第一部 シンポジウム「英語教育のカリキュラム」

12:30～15:00／18号館ホール

#### 【報告】

英語教育カリキュラムの全体像 山本史郎教授

英語Ⅰの体制

教材の改訂について 西村義樹准教授

運営の体制について 加藤恒昭准教授

教室から 坪井栄治郎准教授

英語Ⅱの体制

P O (Presentation/Oral) の授業について

中尾まさみ准教授

R (Reading) の必修化と語彙集の編纂について

能登路雅子教授

作文教育

ライティングセンター（CWP）の活動について

トム・ガリー特任准教授

#### 【パネル・ディスカッション】

「駒場の英語教育はどうあるべきか」

司会 木畑洋一教授

発言 山本泰教授、菅原正教授、内野儀教授、

斎藤兆史准教授

[総括]

駒場の英語教育の今後

菅原克也教授

第二部 ワークショップ

「教室の現場で—PresentationとComprehension」

15:30～17:30 コラボレーションルーム 1

進行 エリス俊子

[報告と構想]

P W (Presentation/Writing) 伊藤たかね教授

P O (Presentation/Oral) 小林宜子准教授

P O 山本久美子特別教育研究教員

C (Comprehension) 河合祥一郎准教授

[全体討論]

●問い合わせ先

教養学部英語部会主任室

TEL:03-5454-6279 (内線:46279)



お知らせ

低温センター

保安教育『低温講習会』のお知らせ

液体窒素・液体ヘリウム利用者を対象にした講習会を下記の要領にて開催いたします。この講習会は高压ガス保安法で義務づけられている保安教育の一環として行うものです。対象者は、主として今年度入学の修士課程一年生等新たに寒剤を利用し始める学生及び教職員です。研究室の該当者は、必ず出席するようにお願いいたします。

なお申し込み方法は低温センターホームページ

(<http://www.crc.u-tokyo.ac.jp/>) 低温講習会についてをご覧のうえ、5月18日(金)までにお申し込みください。

日時: 5月23日(水) 15:00～17:00

場所: 武田先端知ビル5階 武田ホール

講習内容:

- 高压ガス保安法の概要
- 高压ガス容器の取り扱い方
- 液体窒素・液体ヘリウムの特性と取り扱い方
- 実際の利用手続き、事故例の紹介
- 共同利用装置について

連絡先: 低温センター (内線22862)

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第55回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会が主催する第55回小石川植物園市民セミナーが下記の通り開かれます。今回は、首都大学東京の村上哲明先生による、シダ植物の種に関する講演です。最先端の植物科学研究に気軽に触れられる、絶好の機会です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

講師: 村上哲明

(首都大学東京 牧野標本館・大学院理工学研究科教授)

演題: 「形で区別できないシダ植物の多数の新種」

日時: 5月27日(日) 13:00～15:00

場所: 理学系研究科附属植物園本園 (小石川植物園) 柴田記念館

参加費:

セミナーは無料ですが、一般の方は入園料(大人330円)が必要です。

参加申込方法:

5月22日(火)までに往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られることがあります。悪しからずご了承下さい。

主催・参加申込先:

〒112-0001 文京区白山3-7-1

東京大学大学院理学系研究科附属植物園内

小石川植物園後援会

koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp

問い合わせ先:

理学系研究科附属植物園

杉山宗隆准教授 (03-3814-0368)

## お知らせ

### 情報基盤センター

## “分野別データベースユーザトレーニング”開催のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

5月末から6月にかけては、総合・人文社会科学・自然科学の各分野の主なデータベースについて、データベースの提供元から講師を招いて、実習形式の講習を行います。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。

### ●会場：

【駒場】駒場図書館地下1階 会議室（定員24名）

※6/18（月）、6/19（火）、6/21（木）、6/29（金）のみ

【柏】柏図書館 コンファレンスルーム（定員8名）

※6/28（木）のみ

※6/20（水）総合図書館からの中継はメディアホールが会場です。

### 【会場の記載のないコース】

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー（定員12名）

### ●申込方法：

予約が必要です。先着順ですので、お早めに、下記のサイトからお申し込みください。

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

### ●コース内容とスケジュール：

#### ◆総合分野

- (1) LexisNexis Academic  
（世界各国の新聞、企業情報、法律情報など）  
6/7（木）13:45～14:45
- (2) JapanKnowledge  
（百科事典、各種辞書や会社四季報など）  
6/12（火）15:00～16:30
- (3) EndNote Web  
（Web of Knowledge搭載の文献管理・論文執筆支援ツール）  
6/20（水）16:30～17:30（※）  
6/29（金）16:30～17:30【会場：駒場】

※6/20（水）は柏図書館メディアホールに中継します。（予約不要）

#### ◆人文社会科学分野

- (1) Literature Resource Center with MLA  
（文学に関わる人物、作品情報など）

- 5/30（水）13:45～14:45
- (2) InfoTrac Custom（人文社会科学系学術雑誌）  
5/30（水）15:00～16:00
- (3) Business Source Elite / SocINDEX with Full Text  
（経済学・社会学分野）  
6/6（水）13:15～14:45
- (4) PsycINFO / PsycARTICLES（心理学分野）  
6/6（水）15:00～16:30
- (5) Lexis.com（世界各国の法令・判例など）  
6/7（木）15:00～16:30
- (6) ASSIA / LLBA（応用社会科学・言語学分野）  
6/8（金）10:30～12:00  
6/18（月）13:00～14:30【会場：駒場】
- (7) Eighteenth Century Collections Online（ECCO）  
（18世紀英語圏刊行物）  
6/11（月）11:00～12:00  
6/21（木）15:00～16:00【会場：駒場】
- (8) eol ESPer（有価証券報告書、企業情報）  
6/13（水）13:30～14:30
- (9) JSTOR（社会科学を中心とする学術雑誌）  
6/15（金）15:30～16:30
- (10) Web of Science人文社会科学系  
6/20（水）10:30～12:00  
6/29（金）14:45～16:15【会場：駒場】

#### ◆自然科学分野

- (1) AGRICOLA / ProQuest Agriculture Journals  
（農学関連分野）  
6/4（月）15:00～16:30
- (2) SciFinder Scholar（化学分野）  
6/19（火）15:00～16:30【会場：駒場】  
6/22（金）15:00～16:30  
6/28（木）15:00～16:30【会場：柏】
- (3) Web of Science自然科学系  
6/20（水）13:30～15:00（※）  
6/29（金）13:00～14:30【会場：駒場】
- (4) BIOSIS Previews  
（生命科学分野）  
6/20（水）15:15～16:15（※）

※6/20（水）は柏図書館メディアホールに中継します。（予約不要）

#### ●問い合わせ：

学術情報リテラシー係  
03-5841-2649（内線：22649）  
[literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)  
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

## お知らせ

生産技術研究所・先端科学技術研究センター

### 駒場リサーチキャンパス公開

今年も駒場リサーチキャンパスが公開されます。140を超える研究室の公開、専門的なものや身近なテーマを扱った講演会、ジュニア向けの理科教室などなど、盛りだくさんの内容で皆さんをお迎えします。日本の最先端の科学技術を実際に見て、聞いて、体験できる機会です。薫風そよぐ初夏の駒場Ⅱキャンパスでお待ちしています。

**開催日時：**5月31日（木）、6月1日（金）、  
6月2日（土）各日ともに10:00～17:00

**開催場所：**駒場リサーチキャンパス（駒場Ⅱキャンパス）

**開催部局：**生産技術研究所、先端科学技術研究センター、  
国際・産学共同研究センター、駒場オープンラボラトリー

\* 入場無料

\* 理科教室を除いて申込みの必要はありません。

#### 《講演会プログラム》

##### 5月31日（木）

#### <ナノ材料セッション>

- 11:00～ 「未開拓の光：テラヘルツ電磁波技術の新展開」 平川 一彦 教授（生研）  
13:00～ 「固体における水素の挙動を探る」 福谷 克之 教授（生研）

#### <環境エネルギーセッション>

- 14:00～ 「化学屋の見た環境騒動」 渡辺 正 教授（生研）  
15:00～ 「温暖化対策の究極目標はどこか～地球温暖化と費用便益分析～」 山口 光恒 客員教授（先端研）  
16:00～ 「自然に学ぶ新しい太陽光発電」 瀬川 浩司 教授（先端研）

##### 6月1日（金）

#### <CCRシンポジウム～産学連携セッション～>

- 10:00～ ご挨拶 渡部 俊也 センター長（CCR）  
10:05～ 「文部科学省の産学連携政策」 藤田 明博 教授（CCR）  
10:25～ 「産業クラスターと産学官連携」 塚本 修 教授（CCR）  
10:45～ 「産学官連携によるサステイナブルITSの展開研究」 須田 義大 教授（CCR）  
11:20～ 「糖鎖に関する共同開発研究」 畑中 研一 教授（CCR）

- 11:55～ 「NEDOプロジェクトを通じた産学連携研究開発」 香川 豊 教授（CCR）

#### <社会と技術セッション>

- 13:00～ 「変形加工による変形形状制御－薄鋼板の温間プレス成形」 本 潤 教授（生研）  
14:00～ 「渋滞解消の秘策！」 桑原 雅夫 教授（生研）  
15:00～ 「研究開発・知的財産権をめぐる課税問題」 水野 忠恒 客員教授（先端研）  
16:00～ 「リスク管理と企業価値」 藤井 真理子 教授（先端研）

##### 6月2日（土）

#### <ジュニア企画「理科教室」>（午前中、要申込み）

- 「ミクロの世界のワールドカップを制覇しろ！」（土屋研究室 生研）  
「コンピュータの仕組みを知ろう」（南谷・中村研究室 先端研）  
「昆虫の脳と行動のしくみを探ろう」（神崎・高橋研究室 先端研）

#### <130周年・20周年記念セッション>

- 13:00～ 「駒場の歴史と建築」 藤森 照信 教授（生研）  
14:00～ 「たかが20年、されど20年－先端研の「先端」とは何か－」 御厨 貴 教授（先端研）

#### <バリアフリーセッション>

- 15:00～ 「未来を開くユニバーサル・バリアフリー」 福島 智 准教授（先端研）  
16:00～ 「生活に困難を抱える人のための先端技術の活用」 中邑 賢龍 特任教授（先端研）

#### 問合せ先・申込み先：（理科教室のみ要申込み）

生産技術研究所 TEL 03-5452-6864

先端科学技術研究センター TEL 03-5452-5111

[http://www.u-tokyo.ac.jp/event/index\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/event/index_j.html)



## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

### 教養学部で110回オルガン演奏会の開催 《「イタリア展」を記念して》

教養学部では、恒例のオルガン演奏会を次のとおり開催いたします。このたびは、すでに第106回演奏会でおなじみの、アメリカの世界的オルガニストであるダゴステイーノ氏をお迎えし、美術博物館で開催されている《イタリア展》にちなみ、主にイタリアとドイツの曲の数々をお楽しみいただきます。オルガン独奏のほかにオルガンと弦楽四重奏との合奏もあり、また本演奏会のために特別に作曲された山本純ノ介氏のオルガン曲初演もありますので、どうぞご期待ください。

入場は無料です。ホームページを開設しておりますので、ぜひご覧ください。

<http://organ.c.u-tokyo.ac.jp>

日時：6月7日（木）18時30分開演（18時開場）

場所：教養学部900番教室（講堂）

曲目：W・A・モーツァルト

協奏曲：

ニ長調より 第一楽章 [オルガンと弦楽四重奏]

J・S・バッハ

フーガ ロ短調（コレッリの主題による）[オルガン独奏]

A・コレッリ

トリオ・ソナタ ロ短調 [二つのヴァイオリンと通奏低音（チェロとオルガン）]

山本純ノ介

瞬間のオルゲルプンクト（依頼作品、初演）[オルガン独奏]

G・F・ヘンデル

オルガン協奏曲 ヘ長調 [オルガンと弦楽四重奏]

B・パスクイーニ

パストラール [オルガン独奏]

G・ゲラルデスキ

オルガンのための軍隊行進曲風ソナタ [オルガン独奏]

J・S・バッハ

前奏曲とフーガ イ短調 [オルガン独奏]

演奏：

グレゴリー・ダゴステイーノ（オルガン）

江副麻琴（ヴァイオリン）

鈴木絵由子（ヴァイオリン）

高木真悠子（ヴィオラ）

磯野太佑（チェロ）

（大学院総合文化研究科・教養学部オルガン委員会）

（後援：イタリア大使館）

＝ 特集テーマ&執筆部署募集告知＝

## 特集の記事を 執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

### 1. 制作方法

- ① テーマの選定  
全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することになっています。まずは一度、総務部広報課に気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。  
(締切日の2週間前位までに1度ご相談ください)
  - ② 内容・構成の決定  
テーマが決まったら執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。見開き2ページをひとつの単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。
  - ③ 原稿の執筆  
決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。原稿はwordファイルでご制作下さい。
  - ④ ビジュアル要素の提供  
特集に盛り込む写真・図・イラストを執筆部署から提供していただきます。手持ちの写真がない場合は編集スタッフが撮影にうかがいます。
  - ⑤ デザイン  
お書きいただいた原稿、ご提供いただいた写真・図等を素材にして、編集スタッフがページデザインを作ります。もちろん、執筆部署でデザインを作っていただいてもかまいません。
  - ⑥ 校正  
デザインしたページイメージをお送りしますので、主に文字校正を行なっていただきます。
  - ⑦ 完成  
刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。
- ### 2. 締切日
- こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。通常の学内広報の切日（第1・第3水曜日）の**2日前**を原稿締切日とします。
- ### 3. 問い合わせ先・原稿提出先
- 総務部広報課 広報企画チーム  
TEL：03-3811-3393 内線22031  
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

# EVENT LIST

行事名	日時	場所	連絡先・HP等
地球惑星科学公開シンポジウム 「地球惑星科学と社会」 ※29ページ参照	5月10日(木) 18:00~20:00	駒場キャンパス16号館	理学系研究科 地球惑星科学専攻 URL: <a href="http://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp/">http://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp/</a>
東洋文化研究所ワークショップ 「中近世東アジア貨幣史の特殊性・共時性とその貨幣論的含意」	5月21、22日 9:30~18:00	山上会館201-202号室	黒田明伸 E-mail: <a href="mailto:kuroda@ioc.u-tokyo.ac.jp">kuroda@ioc.u-tokyo.ac.jp</a> URL: <a href="http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/">http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/</a>
保安教育「低温講習会」 ※30ページ参照	5月23日(水) 15:00~17:00	武田先端ビル5階 武田ホール	低温センター(内線:22862)
「東京大学の英語教育—改革の道程と今後の展望 Teaching English at Komaba」 ※29ページ参照	5月25日(金) 12:30~17:30	駒場Iキャンパス18号館 18号館ホール(1階) コラボレーションルーム1(4階)	教養学部英語部会主任室 TEL: 03-5454-6279(内線:46279)
第55回小石川植物園市民セミナー 「形で区別できないシダ植物の多数の新種」 ※30ページ参照	5月27日(日) 13:00~15:00	理学系研究科附属植物園本園 (小石川植物園) 柴田記念館	理学系研究科附属植物園 杉山宗隆准教授 TEL: 03-3814-0368
110回オルガン演奏会 《「イタリア展」を記念して》 ※33ページ参照	6月7日(木) 18:30開演 (18:00開場)	教養学部900番教室(講堂)	総合文化研究科・教養学部オルガン委員会 TEL: 03-5454-6139(美術博物館) E-mail: <a href="mailto:cmaeda@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp">cmaeda@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp</a> URL: <a href="http://organ.c.u-tokyo.ac.jp/">http://organ.c.u-tokyo.ac.jp/</a>
行事名	開催期間	場所	連絡先・HP等
常設展示「(新制)東京大学総長著作展(1) —南原総長から向坊総長まで—」 ※1353号参照	3月1日(木) ~5月31日(木)	総合図書館3階ロビー	附属図書館 URL: <a href="http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/">http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/</a>
所蔵品展「測る人・描く人」	3月24日(日) ~5月31日(木)	駒場キャンパス 自然科学博物館	自然科学博物館 URL: <a href="http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html">http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html</a>
創造の広場イタリア	3月24日(土)~6月17日(日) 休館日:毎週火曜日 開館時間 10:00~18:00	駒場博物館1階 美術博物館展示室	東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館 〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL:03-5454-6139 FAX:03-5454-4929
第3回 高齢者教室 (老後を迎えるにあたって起こり得る様々な問題についての、老年病の各専門分野の方々の講演) ※1352号参照	3月28日から6月13日 までの毎週水曜日 (4/4と4/11は休み) 14:00~	東大病院 入院棟A 15階大会議室	東大病院老年病科 TEL: 03-5800-8652 担当 野村
春の公開講座「グローバル化」	5月12日(土) 19日(土) 6月2日(土) 13:30~	安田講堂	総務部広報課内 財団法人 東京大学総合研究会 電話: 03-3815-8345(直通) E-mail: <a href="mailto:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp">kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp</a> URL: <a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_01_j.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_01_j.html</a>
科学技術インテグレーション養成プログラム 社会人向け講座	5月10日(木)、5月24日(木)、 6月7日(木)、6月21日(木)、7月5日(木) 18:00~19:30	教養学部内で開催	科学技術インテグレーション養成プログラム事務局 TEL & Fax: 03-5465-8828 URL: <a href="http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/adult_education.html">http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/adult_education.html</a>
第35回生研公開講座イブニングセミナー 「都市と環境のフィールド調査の現場から」	5月11日(金) ~7月13日(金) (5月25日、6月1日を除く各金曜日 全8回) 18:00~19:30	生産技術研究所 総合研究実験棟(A n棟) 3階大会議室	生産技術研究所 総務・広報チーム TEL: 03-5452-6864/FAX: 03-5452-6071 URL: <a href="http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/">http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/</a>
“情報探索ガイダンス”各種コース ※1355号参照	5/11(金) 15:00~16:00 5/17(木) 13:30~14:30 5/23(水) 11:00~12:00 <English Session> 5/22(火) 15:00~16:00	本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー	学術情報リテラシー係 TEL:03-5841-2649(内線:22649) E-mail: <a href="mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp">literacy@lib.u-tokyo.ac.jp</a> URL: <a href="http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html">http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html</a>
駒場IIリサーチキャンパス公開2007 ※32ページ参照	5月31日(木) ~6月2日(土)	駒場IIリサーチキャンパス	先端科学技術研究センター URL: <a href="http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/events/index.php#events104">http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/events/index.php#events104</a>
総合研究博物館公開講座 『植物・動物・社会—西アジア考古学からみたドメスティケーションの始まり』	6/12(火)、6/20(水)、 6/26(火)、7/3(火) 7/10(火) 15:00~17:00	総合研究博物館 展示ルーム内講義室	総合研究博物館 TEL: 03-5777-8600/FAX: 03-5841-8451 E-mail: <a href="mailto:web-master@um.u-tokyo.ac.jp">web-master@um.u-tokyo.ac.jp</a> URL: <a href="http://www.um.u-tokyo.ac.jp/education/lecture_200706.html">http://www.um.u-tokyo.ac.jp/education/lecture_200706.html</a>

# Contents

## 特集

- 02 平成19年度入学式
- 11 平成19年度大学院入学式

## NEWS

### 一般ニュース

- 18 研究協力部  
「東京大学稷門賞」授賞式を挙げる
- 19 国際連携本部  
第2回日中韓賢人会議、開催される

### 部局ニュース

- 19 留学生センター  
日本語教育集中・特別コース2006年度冬学期修了証書授与式行われる
- 20 医学部附属病院  
平成19年度入職式及び合同オリエンテーション開催される
- 21 大学院教育学研究科・教育学部  
附属中等教育学校で、第8回入学式が行われる
- 21 大学院理学系研究科・理学部  
附属臨海実験所設立120周年記念シンポジウム
- 22 ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構  
「江崎玲於奈先生特別講演会」盛況裏に開かれる
- 22 大学院総合文化研究科・教養学部  
大学総合教育研究センター  
緒方貞子先生による学術俯瞰講義
- 23 地震研究所  
UT購買サイトシステム講習会を開催

### キャンパスニュース

- 24 学生部  
平成19年度進学指導担当教員、決まる

※昨年度の記事については、当時のままの職名等で掲載しておりますのでご了承下さい。

## コラム

- 26 インタープリターズ・バイブル Vol.2
- 26 調達本部です 第26回
- 27 Crossroad～産学連携本部だより～Vol.15
- 28 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第12回
- 28 龍岡門横丁 第16回

## INFORMATION

### シンポジウム・講演会

- 29 大学院理学系研究科・理学部  
大学院総合文化研究科・教養学部  
地球惑星科学公開シンポジウム  
「地球惑星科学と社会」
- 29 大学院総合文化研究科・教養学部  
「東京大学の英語教育—改革の道程と今後の展望 Teaching English at Komaba」  
開催のお知らせ

### お知らせ

- 30 低温センター  
保安教育『低温講習会』のお知らせ
- 30 大学院理学系研究科・理学部  
第55回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 31 情報基盤センター  
“分野別データベースユーザトレーニング”  
開催のお知らせ
- 32 生産技術研究所・先端科学技術研究センター  
駒場リサーチキャンパス公開
- 33 大学院総合文化研究科・教養学部  
教養学部で110回オルガン演奏会の開催  
《「イタリア展」を記念して》

## 34 EVENT LIST

### 淡青評論

- 36 ここで踊れ

◆表紙写真◆ 平成19年度入学式  
(2ページに関連記事)

## 編集後記

「入学式での福島先生の祝辞は、南原総長の式辞と同じくらいの歴史的価値がある」と小宮山総長がおっしゃっていたそうです。壇上で涙した理事もおられたとのこと。新聞のコラムにも取り上げられ、会場に行けなかった私のところにも、職員や一般の方から「感動した」との声がたくさん入ってきました。式で「不覚にも落涙した」というある先生によれば「障害と涙は『同情』ととられかねないので、禁物のところがありますが、福島さんの話は本当に深いところで普遍性がありました」とのこと。「同情の物語」を遥かに超えた、この「普遍性」こそが、多くの人の心を動かしたのだと思います。(と)



七徳堂鬼瓦

## ここで踊れ

「知識というものは、法のであれ、科学のであれ、街中で得られるものではありません」。

だから在学中にしっかり勉強して下さい、という意味である。時は1978年、所はパリ第二大学、或る3年生向け講義の当年度最終回における閉講の辞のなかで、名だたる雄弁家の先生に真正面からこう言われて、学生たちも深い感動に固まっていた。

大学とは、そういうものである。図書館と研究室（または実験室）と教室、これが大学である。もとより、街中の実践家の学問には、ときにノー

ベル賞あり、しばしば頭が下がる。それこそ広い知的基盤である。しかし、それでも、である。

象牙の塔は、今時すこぶる評判が悪いが、もともと大学は教会から生まれたもの。禁欲と静謐とのなかでの、自由な批判精神に基づく探求と議論とから学問は発展してきた。

しかし、現代において、知識権力に対する学生たちの（一面で尤もな）反乱ののち、今度は大学の社会化を求める時代の（一面で尤もな）攻撃のまえで、大学は、すっかりアイデンティティを見失っているのではないだろうか？ そして、次から次へと新しいことが重なって、疲弊しているのではないか？ いかにも、「時代の要請に従え」、大学は同時代に生きているのだとしても、学術情報サービス会社でも知的イベント企業でもない。いかに高等教育の大衆化の状況でも、いわゆる「学校」とは違う。大学が、時代への迎合や同一化によって自己を見失えば、過労死するか時代の道化師となるかが落ちであろう。

探求の情熱と喜びとを鼓舞し、大学としての真の創造性を確保するために、あらゆる叡知を結集して状況を立て直す必要がある。

矜持を以て基本を大事にしよう。図書館と研究室（または実験室）と教室。特に文科系では、書物の回りに学ぶ者が集う。書物は光であり喜びであり師であり友であり実験設備ですらある。何人といえども、このことを忽せにしてはならない。

先哲も言うではないか。「ここに薔薇がある。ここで踊れ」。

そして、先の先生の言は、在職中にしっかり研究して下さい、という意味にも聞こえる。

北村 一郎（大学院法学政治学研究所・法学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

No. 1356 2007年4月25日  
東京大学広報委員会

〒113-8654  
東京都文京区本郷7丁目3番1号  
東京大学総務部広報課  
TEL：03-3811-3393  
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp  
<http://www.u-tokyo.ac.jp>

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。